
IS インフィニット・ストラトス 荒鷲の軌跡

eagle

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 荒鷲の軌跡

【Nコード】

N0714T

【作者名】

eagle

【あらすじ】

女性だけが使用出来る飛行パワードスーツ、IS>インフィニット・ストラトス<

それ操る事の出来る2人の男子、「シホウカンナギ師鳳神薙」と「織斑一夏」の物語

駄文です。オリ主チートです。オリキャラ複数登場します。更新亀

です。原作キャラは性格崩壊するかもしれません。原作ブレイクします。
誤字、脱字は遠慮無くいつて下さい。感想、お待ちしてます！

P r o l o g u e 金色の荒鷲（前書き）

P r o l o g u e です。

Prologue 金色の荒鷲

ISとは…

正式名称「インフィニット・ストラトス」。

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツである。

しかし、『制作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持てあました機械は『兵器』へと変わる。しかし、アラスカ条約の基、“ISを『兵器』としての使用を禁止”された。それは各国の思惑から『スポーツ』の為の飛行パワードスーツに落ち着いた。

現在確認・登録されているISのコアは467。コアは完全にブラックボックス化されて、『制作者』だけが作る事が出来、『制作者』はそれ以上コアは作らない。

そして、このISには致命的欠陥がある。

それは…

起動・操縦は女性にしか出来ない事

side 神薙

俺の目の前にISが飛行している。国籍不明の機体。見るからに第三世代機、しかもイギリスの二つ目。

「……そろそろ…墜としたい…アレ、いい？」

【トライクラッシャー】及び【I-Boost】の使用、許可します。御武運を、閣下

基地から女性司令官の許可が降りる。

「……了解、行くぞ…インパルス・イーグル」

俺の呼び掛けに呼応するかのように、両手にパイルドライバー【トライクラッシャー】が装備され、機体は茶色と白から金と白へ変わる。

それに気付いたか、前方の国籍不明機がビットを分離、俺に向かってビームを発射。それを急上昇して回避。しかし、ビームは曲がり、再び俺に向かって来る。

…BTの偏向射撃か…やるな。
フレキシブル

「…ウザい……ビット…叩っ斬ってから、狙う」

両手にショートブレードを出し、右手を逆手に、左手を順手に構え、

“瞬時加速”（イグニッション・ブースト）を使用してビットとの差を詰める。

他のビットからの射撃を回避し、先ずは2機。

もう2機壊そうとしたら、何処からかビームが。

そこを見ると、レーザーライフルを構えたIS【サイレント・ゼフィルス】がいた。

「お前等に、構ってなど……いられない」

「…そう。なら、早くこちら（・・・）に来てよ」

「…だか断る」

「じゃあ、力づくで」

2機のBTから、偏向射撃が俺に向くが…

「遅い」

姿はブレて、いなくなる。否、BTを斬り伏せて、既にサイレント・ゼフィルス目の前にいた。

「……墜ちろ」

右手でサイレント・ゼフィルスの装甲にトライクラッシャーを撃ち込む。

が…

「！！！」

「甘い」

【インターセプター】によって、寸での所で止められていた。

…なんつつふざけた胴体視力と反射神経してんだ。

「最期の質問。こちら側に来る？それとも来ない？」

サイレント・ゼフィルスの操縦者は妖しい笑みを浮かべる。

「……応えは…否」

「そう…残念」

次の瞬間、2機のミサイルビットを至近距離からぶつ放し、サイレント・ゼフィルスは其処から離脱。俺はI - Boostを用いて瞬時に距離を取り、ショートブレードで2機を斬る。

「……任務失敗…すまなかった」

今度こそ、俺が潰してやる…絶対に

「ファントム・タスク
…亡国企業」

「……師鳳神薙…インパルス・イーグル、帰投する」

了解

s
i
d
e
o
u
t

Prologue 金色の荒鷲（後書き）

何故か頭からサイレント・ゼフィルスが登場！
そしてバトルシーンは苦手なのに頭から…

さて、次回にどう繋げたら良いだろう？

取り敢えず次回予告します。

日本・IS学園に入学する事になった一夏と神薙。入学初日から面倒な事に巻き込まれ…

次回IS > インフィニット・ストラトス< 荒鷲の軌跡 第1話
学校に男子2人だけはかなりキツイ

第1話 学校に男子2人だけはかなりキツイ（前書き）

まだ始めなのに長つたらしい。

どなたか文の構成能力を自分に下さい。

遅くなりましたが、本文中の

「」は普通の会話

『』は集団の会話

【】は固有名詞
は通信

（ ）は読みがなや心の心
になります。

では、第1話です！

第1話 学校に男子2人だけはかなりキツイ

IS学園とは……

ISの操縦者育成を目的とした教育期間であり、その運営及び資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。但し、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産における公開する義務があり、また黙秘、陰匿を行う権利は日本国にはない。また当機関内における如何なる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解出来る解決をする事を義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。

——IS運用協定『IS操縦者育成機関について』の項より抜粋。

side神薙

「全員揃ってますねー。それじゃあ^{ショートホームルーム}SHR始めますよー」

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任の山田真耶先生（さつき自己紹介していた）。

身長はやや低めで、生徒のそれと殆ど変わらない。しかも服はサイズが合っていないのかだばつとしていて、益々本人が小さく見える。

何故俺が今先生の話をしているかというと…

……クラスメートがほぼ全員女子だからだ。

決して先生に惚れたとかでは無いので気を付けてほしい。

一夏は窓の隣の女子に顔を向けるが無視されてるし、俺意外の唯一の男子生徒の一夏自身はかなり前にいる。

…ああ…周りからの視線が辛い…。想像以上に辛い。いくら前まで居た所が近い状況だとしても、こっちは大違いだ。
向こうがシャキツとしてカクカクしてるなら、こっちはフワフワで
やんわりだな。

「織斑くん、織斑くん」

一夏の奴、自分の思考の中に埋まってるな。…無理もないか。俺みたいな経験が無いんだもんな、あいつは。

「織斑一夏君！」

「はっはい！」

…予想通りをありがとう、一夏。

「ひゃっ！」

そして良いリアクションをありがとうございます、山田先生。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？」

怒ってるかな？ごめんね、ごめんね！でもね、あのね、自己紹介って『あ』から始まって、今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれてるかな？だ、ダメかな？」

先生が謝罪の言葉のオンパレードなマシンガントークを披露してる。

…オイー夏（馬鹿）、早く自己紹介しろ。後がつつかえてる。そして先生が困ってる。

「いや、あの、そんなに謝らなくても…っていつか自己紹介しますから、先生落ち着いて下さい」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

山田先生が“本当”の3段活用して、一夏（馬鹿）の手を握る。

一夏がこつちを向く。かなり緊張してるな。

まあ、俺にや関係無いがな。さて、本の続き続き…

「えー…えっと、織斑一夏です。よろしく願いします」

……………

「以上です」

…よし、一発決定。

スパアン！！

「いつ………！？」

一夏が此方を振り向く。

「げえっ、関羽とジャンヌダルク！？」

二発目決定。

スパアン！！

「誰が三國志の英雄で…「誰がフランスの聖女だ、馬鹿者」

「…千冬先生、お久しぶりです」

「神薙か、久しいな」

俺は千冬さんを見上げて挨拶する。だって俺、背が低いから。確か
154？だった気が…

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいしないと…」

山田先生は千冬さんのファンだったんだ。ビックリ……するかボケ。

「……千冬先生。…俺、席に…戻らなくても良い。神薙はちゃんと自己紹介しろよ」……はい」

千冬先生…酷い。俺、後ろの方が良かったのに。…まあ、状況は変わらんがな。

「……師鳳…神薙。好きなモノは…本…昼寝…静な所。………よろしく」

面倒臭いから簡単にで。さっさと自分の席に…

着けなかった。理由は1つ。

このクラスを女子のほぼ全員が暴走したからだ。

「きゃ〜！かわい〜！」／／／／／

「こっち向いて〜！」／／／／／

「一緒の部屋になって〜！」／／／／／

「織斑君とは違って、“格好いい”って言うより“可愛い”って感じだね！」／／／／／

「守ってあげたくなるね〜！」／／／／／

「織斑君との絡み合い……ハアハア……」／／／／／

物凄く暴走してる。めっちゃ黄色い声を出してる。1人頭を改革させねばならない奴がいた。

「……五月蠅いの…嫌い…」

“助けて下さい、千冬先生。あなたの力が必要です”

目でそう伝えたと…

Bannon!

教卓を叩く音。暴走していた生徒が静かになる。

「静かにしろ馬鹿共。私は織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

千冬さんの自己紹介が終わる。すると…
黄色い声援の雨が。

「キャーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

当たり前だ。本人居るのに千冬さんに失礼だろうが。

「ずっとファンでした！」

そうだと思ったよ。ってか大体の奴がそうだろうが。

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

別に何処からでもいいだろ。海外から来てる奴だって居るんだぞ。因みに俺もその一人だ。

「あの千冬様の為なら死ねます！」

死ぬな馬鹿。まだ志途中だろうが。

「…毎年、良くもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

「きゃあああああつ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

…確かに、馬鹿という変態の集まりかもしれない。捌き切れない。

「……………千冬さん」

「何だ？」

「……………静に…させたい。……………五月蠅くて……………手元が、狂いそう」

「まあ落ち着け。私も似たような事を考えていた所だ」

「……そろそろ、戻ります」

…五月蠅くて本も読めん。

「ああ、解った。そして織斑、お前は挨拶も満足に出来んのか」

「いや、千冬姉、俺は…」

スパァン！！

「織斑先生と呼べ」

「…はい、織斑先生」

今日3度目の綺麗な音は、一夏の頭をえぐった。…俺もアレぐらい綺麗な音出せたらなあ……先に言っておくが、俺は千冬さんのファンでは無い。

そして一夏と千冬さんの関係が教室に流失した。

「え……織斑くんって、あの千冬様の弟…？」

「それじゃあ、世界で二番目の“男でISを使える”っていうのも、それが関係して…」

「ああっ、いいなあっ。変わってほしいなあっ」

前2つはまあいいとして、一番最後は無理だろう。あの人なりに、一夏の事……この先は黙っておこう。千冬さんの視線が怖い。

「何、何処からか失礼な事を言われた気がしてな」

……俺の心は千冬さんに筒抜けらしい。プライバシーも在った物ではないな。

「そう言えば、師鳳くんも千冬様と親しそうだったね」

…俺もやつちまったか？

「そう言えばそうだね。織斑君叩く時、息ピッタリだったもんね」

「で、どうなの師鳳くん？」

いろんな人が詰め寄ってきた。

“…千冬先生、どうしましょう？”

“仕方ない。今回は頭のキレるやつが居たのが運の尽きだったな”

…はあ、仕方ない

深い溜め息を付いた後、小さく呟く。

「……少しの間……同じ所……いた」

「いいなあ……」

「ねえ、その時の千冬様ってどんな人だったの？」

「お姉様との関係って？」

「……全部、ノーコメント」

『ええ〜〜！』

“ええ〜〜！” って言われても…

スパァン！！

スパァン！！

スパァン！！

「落ち着け馬鹿共」

『はい！千冬様！』

…あなたの威厳を俺にも下さい。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えて貰う。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

千冬さんの独壇場だな。かなりのカリスマ性を感じる。この人にファンが多い理由の1つに、これが挙げられる。

「席に着け、馬鹿者」

一夏、まだ座って無かったのかよ…

side out

.....

side 一夏

「あー.....」

参った。これはマズイ。ダメだ。ギブだ。

一時間目の授業が終わって今は休み時間。けれど、この教室内の異様な雰囲気はいかんともしがたい。

“世界で二番目”であって、結局それだけ。ニュースに取り上げられる程有り得ない事だ。だからその物珍しさに学園内の生徒が集まっている。俺以外に男でISを操縦出来る人間は、今この学園内に神薙だけ。かなり心細いが、1人よりはうんというい。

だから俺は、本を読んでいる神薙の席に行った。

「神薙、久し振りだな」

「.....」(コクリ)

「神薙もIS使えたんだな」

「……………」(コクリ)

相変わらず、無口で“余計な労力は使わない”って感じが出てるな。

「お前はこの学園、どう思う?」

「……………いい設備。…申し分ない」

「いや、そうじゃなくてさ、この…なんだ、女子だけって事はどう思っつて聴きたいんだ」

「……………今更。…ISを使えるのは、女性だけ。それ以外の何者でもない。故に……………一般常識としてしか考えない。だから…何ともない」

本から目を反らさずに淡々と応える。時々、こいつのこういう所を
すげえ羨ましく思う。

「…それに…俺、今お邪魔……………」

珍しく読んでいた本から視線を逸らし、俺の後ろを見る。

「誰か居るのか?」

「……………篠ノ之さん」

そう言われて振り向くと……………

「…ちよつといいか」

6年ぶりの再会になる幼なじみ「篠ノ之箒」が昔と変わらずポニーテールにして立っていた。

「廊下でいいか？」

「おう」

すたすたと廊下に行く箒。そこに集まっていた女子がざあっと道を空ける。モーゼの海渡りかよ。それでまあ廊下に出たんだか、俺と箒から4m程度空けて包囲網が完成している。しかも全員聞き耳を立てているのをひしひしと感ずる。

しかし、半分程は教室の前に残っていた。しかも殆ど上級生。

…ありや師鳳目当てだな。俺が言うのも何だが、誰から見ても“可愛い”が第一印象だろう。ちっこいし、髪長いし、女顔だし…

それはそれで置いといて、

「そう言えば」

「何だ」

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「……………」 / / / /

俺の言葉を聞くなり、口をへ字にして顔を赤らめた。……え？何で怒ってんの？褒めたのに。

「何でそんな事知ってるんだ」／／／

「“何で”って、新聞見たし…」

「な、何で新聞なんか見てるんだっ」／／／

何を言っているんだ、箒は。意味が分からない。新聞くらい好きに読ませろよ。あと、久しぶりに聞いたけど、口調がなんか男っぽいと言っか、サムライって感じだな。相変わらず。

「あー、あと」

「な、何だ!？」／／／／

「……………」

「あ、いや…」

流石に自分剣幕に気付いたのか、ばつが悪そうにする箒。しかし妙に興奮しているな。不思議なやつだ。

「久しぶり。6年ぶりだけど、箒ってわかったぞ」

「え…」

「ほら、髪型一緒だし」

そう言って箒の頭を指すと、箒は急に長いポニーテールをいじりだした。

「よ、よくも覚えているものだな…」 / / / /

「いや、忘れないだろ。幼なじみのことくらい」

「……………」

S H Rに続いてまた睨まれた。えー、何で？

二時間目の始まるチャイムで、それまで俺と箒を遠巻きに見ていた包囲網も自然と瓦解する。……………うん。流石はIS操縦者、行動が機敏だ。

「俺達も戻ろうぜ」

「わ、わかっている」

ぶいっと俺から目を逸らし、また来た時と同じ様にすたすたと歩き出す箒。この幼なじみは俺を待つ気は無いらしい。6年の歳月はこうも人を変えるのか。いや、うそ。箒は昔からこんな感じだ。

初志貫徹、日月進歩、日々鍛錬、頑固一徹。篠ノ之箒と言えばそういう言葉が男子よりよく似合う女子。小学校の頃から変わっていない。

（個人的には臨機応変とか、その辺も少し入れてほしいところなんだが……………そう言えば神薙は真逆な感じが…）

スパァン！！

「とつとと席着け、織斑」

「……………ご指導ありがとうございます、織斑先生」

俺の脳細胞は午前中だけで3万個死んだ。

side out

.....

side 神薙

二時間目、一夏は案の定、7発目を喰らうことになった。

一夏は山田先生の言った事ほぼ全てにハテナを浮かべた。

チラッと隣の女子を見ると、山田先生の話に時々頷いてはノートを取っていた。

因みに俺は軍隊出だからなんて事はない。でもこの教室の中で俺の事を一番知っているのは千冬さんだろう。その次が教師という事で山田先生、最後に1年間だけこっちに居たときに知り合った一夏。一夏は“俺が外国から来た”としか伝えて無いがな。

「織斑くん、何か分からない所がありますか？」

挙動不審の一夏に救いの手を差し伸べたのは山田先生だった。

「あ、えつと……」

「分からない所が在つたら訊いて下さいね。何せ私は先生ですから」

山田先生が胸を張つて言う。

それに助けられた一夏は思い切つて質問した。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「殆ど全部分かりません」

……。

お前ふざけてる？

「え……？ぜ、全部、ですか……？」

ほれみろ、先生困っちゃっただろうが。

「え、えつと……織斑くん以外で、今の段階で分からないっていう人はどれ位いますか？」

拳手を促す山田先生。

しかし…

シーン…

「あ、あの…師鳳くんは全部分かりますか？」

「……………」(コクリ)

オイ一夏、お前の所為で俺も疑われたぞ。しかも“お前も分かるのか!?”みたいな顔すんな。少なくともこの学年の誰よりも分かってるつもりだから、一応。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパァン!!

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……………」

「やれと言っている」

「……………はいやります」

流石にこれはキツいかもな。今回は手伝ってやるか……………勿論、見返りは戴くが。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。

そういつた『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解できなくても覚える。そして守れ。規制とはそういうものだ」

全くです。

その後、一夏は放課後に残って参考書を覚える事になった。その時の山田先生と言ったら……さっきまでの自信は一体…。

んで現在、休み時間。先の休み時間同様に一夏が一方的に話し、それを受け流す。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「……………」

不意に、女子の声が聞こえた。

地毛の金髪が鮮やかで、白人特有の透き通ったブルーの瞳がややつり上がった状態で俺達を見る。

「訊いてます？お返事は」

「あ、ああ。訊いてるけど……どついう用件だ？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話し掛けられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものあるんじゃないかしら？」

…俺の一番嫌いなタイプの人間だな。

今のこのご時世、つまり女尊男卑の社会に乗った奴。何度も似たようなを見てきたけど、やっぱり嫌いだ。
確か一夏もこっぴつの苦手だったな。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

おお！一夏 Good job！

だけど…俺知ってんだよね、こいつの名前。どうしよか？

「わたくしを知らない？この…「セシリア・オルコット。貴族出身でイギリス代表候補生。入試での技能試験にて教官を倒し、それが反映され入試主席でここに入学。…珍しく、語った」…お、おほん。ちゃんと知ってらっしゃったんですね」……」

ホントに珍しく語ったぞ。余りにムカついたから話し途中で入れたけど。

「あ、質問いいか？」

「ふん、下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわよ。よろしくてよ」

「“代表候補生”って、何？」

殴って良い？良いよな？良いんですね？よし、ぶん殴る。

スパアン！！

「いっつう〜〜！！何すんだよ、神薙！」

「……聴いて分かれ、馬鹿者。…聴いて字の通り、読んで字の如く。
……国家代表IS操縦者の候補生と選出される人間の事。つまり
…エリート」

「そういわれればそうだ。って、神薙はよくそんな事知ってるな。
しかも今日は良くしゃべるし」

「…基本的一般知識。良く話すのは馬鹿共が多いから」

「……すまん」

「そ、そう言う事ですわ。わたくしはエリートなのですわ！本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

今更持ち直そうとしてる。見苦しい事この上ない。

「そうか。それはラッキーだ」

「……………」（コクリ）

「……馬鹿にしていますの？」

少なくとも、俺はそのつもりだったんだが。

「大体、あなた方ISについて何も知らないくせに、よくこの学園

に入れましたわね。男でISを操縦出来ると聞いていましたから、
少くらしい知性さを感じさせるかと思っていきましたが、期待外れ
ですわね」

「俺に何か期待されても困るんだが」

「……」(コクリ)

「ふん。まあでも？私は優秀ですから、あなた方のような人間にも
優しくしてあげますわよ」

「……一タム力つく人間だ。お前がそんなに偉いかよ。」

「ISの事で解らないことが在れば、まあ……無いて頼まれたら教
えて差し上げててもよくつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒
したエリート中のエリートですから」

「……馬鹿め。」

「……あなただけではない。この一夏(馬鹿)も倒した」

「……そう言えばそうかも」

「は……？」

おお！“ありえねえ”って顔してやがる。

と言つても、こいつの場合、突っ込んで来た相手を回避。相手は壁
に激突、操縦者は気絶。それでお終いだが…

「わ、わたくしただだと聞きましたか？」

物凄く動揺してる。

「“女子では”ってオチじゃないのか」

「つ、つまりわたくしだけではないと……?」

「いや、知らないけど」

「あなた!あなたも教官を倒したって言うの!?」

「うん、まあ。多分。そう言えば、神薙はどうだった?」

俺に話振って来やがった!?

「そ、そうですわ!あなたはもうなんですよ!?」

これで答えたら絶対にこの人激怒すんぞ。少なくともこの話聞いている奴全員が問い詰めに来るな。

「……………」

「どうなんですの?黙ってないで言っ……………」

キンコンカンコン……

俺は三時間目開始のチャイムに助けられた。

「っ…………!また後で来ますわ!にげないことね!よくって!?」

やなこった。めんどいから黙ってるけど。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

今回は千冬さんが教卓の前に立つ。山田先生は隅でメモってる。大事なんだな…

なんて呑気な事を考えていたら…

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

……ん？クラス代表を決める？この調子で行くと……マズい。非常にマズい。今ここで言っても言わなくてもバレる。どうすれば…

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

やったな一夏。大人気につきクラス代表候補者だ！

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？いないなら無投票当然だぞ」

「ちよつ、ちよつと待った！俺はそんなのやら……」“自薦他薦は問わない”と言った。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」……い、いやでも……「待って下さい！納得がいきませんわ！」

更にオルコットさん登場！

「その様に選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥曝し（はじさらし）ですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにその様な屈辱を一年間味わえと仰るのですか！？」

……。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

……。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「……………」

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で…」

「……………」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一マズい料理で何年覇者だよ」

「なっ……………！」

どうやら一夏が対抗しているらしい。しかし俺は…

……………抑え込むのもやつとな程の殺気が爆発寸前だった。

千冬さんは察したのだろうか、2人を止めに入ろうとしたが…

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

……………うぜえ。限りなくうざい。

「決闘で…」

その時、俺の中の何かがプツンと、音を立てて切れた。

…もう我慢はしない。

……………部分展開、右腕、【トライクラッシャー】…

ドンー!!

「少し……黙れ。喧しい……カス共」

『!?!?!?!?』

その場にいる全員の驚愕と恐怖の視線を受けた。千冬さんまで震えているみたいだった。

「今すぐ……黙れ。……さもなくば……」

俺は自分の頭に部分展開された右腕を当てた。

「……頭を杭で決るよ」

「……神……薙?」

「……なんだ、一夏」

一夏は顔を真っ青にしていた。同様にオルコットも真っ青で、今にも泣き出しそうだった。

「その……すまなかった」

一夏が謝ったところで、俺は部分展開を解除。今更後には戻れない。だから……

「……俺……でる」

宣戦布告をした。

「ふ、ふざけた事は言わないで下さる！？第一、あなたは入試の結果はどうなんですか！？先の話からすると教官には勝っていないみたいですが？」

オルコットが噛みついてきた。

「……入試は、免除……」

「へ……？」

「あ、あなたねえ！わたくしを馬鹿にして……師鳳の話は真実だ……！？織斑先生！それはいつたい……？」

千冬さんが説明する。

「師鳳は本当に入試免除でここ入学した。理由は1つ。師鳳自身のIS学園への進学希望で、EUから申請された」

「EUですって!？」

「ああ、そうだ。師鳳はEU選出のヨーロッパ代表だ。そしてこの方が、『黄金の荒鷲』『インパルス・イーグル』の操縦者で世界初の男性IS操縦者、ベルギー空軍所属、師鳳神薙名誉少佐だ」

『……………』

突然のカミングアウトに教室は凍り付いた。山田先生も、一夏も、オルコットも。全員がさも信じられないような、しかし、千冬さん

が敬語使うまでの有り得ない真実に固まるしかなかった。

「…俺は、気にしない。静かなら、それでいい。……だから…離れないでほしい」

……それが俺の願い。本当の、切実な願い。

地位、性格、特殊さ…数え上げればキリがない。

地位と特殊さを隠しても友人は出来なかった。だけど中2の夏、変わった。一夏と知り合った。あいつが俺の第一号の親友となった。

ただそれだけが俺の喜びだった。本当の喜びだった。

それを…こんな事で無くしたくなど無かった。

俺の独りきりは、また始まるのか…

「気にしねえよ、そんな事。“親友”だろ？」

でも一夏は俺を見捨てなかった。

「……—…夏？」

「俺はお前の親友だ。だから、俺はおまえを見捨てない。地位がなんだ。それがどうしたっていうんだ。俺は今まで通りに、親友だ」

「あり…がと、一夏」

今出来る最高の笑みで一夏に礼を言う。今の俺に出来る事はこれぐらいだから……

その後、俺のクラス代表決定戦の出場が決定。日時は一週間後の月曜の放課後となった。

T o b e c o n t i n u e . . .

第1話 学校に男子2人だけはかなりキツイ（後書き）

……駄目だ。駄文だ。ひどい出来だ。

泣きたい。

そして我が校で、まもなく中間考査なので二週間程お休みします。

取り敢えず次回予告しときます。

クラス代表決定戦に出場する事になった一夏と神薙はその日、部屋の割り振りが決まる。クラス代表決定戦までの間、2人は別々に特訓する事に。……そして、火蓋は切って落とされた。

次回、 IS>インフィニット・ストラトス< 荒鷲の軌跡 第2話 クラス代表決定戦開戦！

第2話 開幕！クラス代表決定戦！（前書き）

お待たせしました！

第2話です！

第2話 開幕！クラス代表決定戦！

side 神薙

「うつ……」

その日の放課後、一夏はげんなりとしていた。

「い、意味が分からん……。なんでこんなにややこしいんだ……？」

「……もつと単純に……冷静になれば、すぐ解る。馬鹿でも……」

「それ、俺が馬鹿だと言いたいのか？」

「……（ふるふる）……一夏も、やれば出来る。だから……手
伝う」

「ありがとな、神薙。付き合わせて」

「別に……好きで、やってる」

ISの参考書やらを広げた教室の机に突っ伏している一夏と、その横で本を読みながら一夏のサポートをしている俺。それを外からきやいきやい小言を話している女子。

例えばこんな事。

「早く織斑くんか師鳳くんに話しかけなよ」

「えゝ？でも恥ずかしいし…」／／／／／

とか

「織斑くんと師鳳くんって、性格違っけど並ぶと違和感ないよね」

「そうそう！全然違っのにね…」

やら

「師鳳様と……じゅるり」／／／／／

「師鳳様と……ハアハア」／／／／／

「師鳳様は……私の嫁」／／／／／

なり

「師鳳くんと織斑くんの……アリだわ」／／／／／

「どっち攻め？やっぱり織斑くん？はたまたまさかの師鳳くん？」

「……どっちもありだよ…」／／／／／

………みたいな話を話しているらしい。まともな奴殆どいないけど……

あの後、よく解らんがクラスメートのみんなは普通だった。特にどうこうするでもなく、兎に角普通だった。

「……今日は、終わり。また…明日」

「お、おう…疲れた…」

本を閉じて一夏に終了を伝えた俺はすつくと立ち、対して一夏は一気に脱力。立つ気力さえ感じられない。だらしが無いことこの上ない。

「ああ、織斑くんに師鳳くん。まだ教室にいたんですね。良かったです」

「はい？」

「？」

声のする方へ顔を向けると、副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

「一夏くんの部屋も師鳳くんの部屋も2人部屋なんですが、師鳳くんの部屋は転校生が来たときにその子と同じ部屋になります」

「……………」

（コクン）

俺は無言で頷き、その鍵受け取る。鍵と一緒に渡された紙切れに“1028”と書かれていた。

「俺の部屋、決まってるじゃないじゃなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど…」

一夏が山田先生に聞く。こいつ、俺とは事情が全く違うからな。

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……織斑くん、そのあたりの事って政府から聞いてます？」

山田先生は一夏にだけ聞こえるように耳打ちした。しかし、俺にはしつかり聞こえていた。

「そう言うわけで、政府特命もあって、兎に角寮に入れるのを最優先したみたいです。1ヶ月もすれば個室の方が用意出来ますから、暫くは相部屋で我慢してください」

「…あの、山田先生、耳に息がかかってくすぐったいんですが…」

「あつ、いやっ、これはそのっ、別にわざととかではなくてですねっ……！」

山田先生はまたわたたと必死に弁解を始めた。

「いや、解ってますけど…。それで、部屋は解りましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備出来ないうし、今日はもう帰ってもいいですか？」

「あ、いえ、荷物なら…」

「私が手配してやった。有り難く思えよ」

「ど、どうもありがとうございます……」

ドアの方からまた声が、しかも今回は脳内でターミネーターのBGMが流れるオマケ付き。一夏も満更では無さそうだ。それにしても、ちゃんと一夏の荷物を用意してるなんて……流石は弟思いの千冬sゲフンゲフン。千冬さんから鋭い視線が…

「師鳳、また変な事を考えなかったか？」

「……………」（フルフル）

やっぱりこの人にプライバシーという物は通用しないな。

「それはさておき、用意したのは生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

大雑把。この一言で大方片付くぐらいの荷物だな。

「師鳳の荷物はついさっき届いた。部屋の中に段ボールを積んでおいたから後は出して整理しておけ」

「……………」（コクン）

「じゃあ、時間を見て部屋に行って下さいね。夕食は6時から7時、寮の1年生用食堂で取って下さい。因みに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違います

けど……えっと、その、織斑ちゃんと師鳳くんは今のところ使えませ
ん」

「え、何ですか？」

……。

スパァン！！

呆れて物もいえない。だから身体が素直に反応した。

「いつつ〜！！」

「……一夏、アホ……」

「まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

…やっぱりアホだこいつ。ここがどこだか忘れていやがる。

「おっ、織斑くんっ、女子と一緒に風呂に入りたいんですか！？
だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

「ええっ？女の子に興味が無いんですか！？そ、それもそれで問題
のような……！！まっ、まさか！し、師鳳くんと……！！？いつ、い

や、それはセーフのようなアウトのような……」

あゝあ……お前の下らん事の所為で山田先生が……

更にその山田先生の騒ぎが廊下の女子達に伝播。「婦女子談議」に花が咲く。

「織斑くん、男にしか興味が無いのかしら……？」

いや、ない。絶対にない。コイツは普通だから。

「それはそれで……いいわね」／／／／／

良くない。むしろ最悪。

「師鳳くんと……これはセーフの範囲内？」

アウトに決まってんだろーうが。

「勿論！だって師鳳くんは女の子だよ！絶対！」

誰が女子だ馬鹿野郎。言っただ奴今すぐ体育館裏に来い。ブチのめしてやる。

「あのスタイルにあの髪、顔から声まで女の子……コレがホンモノの男の娘……」／／／／／

もうやめれ。そこから先はアブノーマルな領域。

「あの2人の友好関係を洗って！すぐにね！明後日までには裏付け

とつて！」

お前はどこかのテレビ局のプロデューサーか？それとも新聞社のチーフか？はたまた警部さんか？

……ってコレ、俺への被害甚大じゃね？

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、師鳳くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

山田先生心配しすぎ。俺達高校生。OK？そして寮までの50mで、どう道草くえと？施設は確かにかなりあるし、何よりも広い。しかし、今は少なくとも関係ない。そしてこの空気から今すぐにでも解放されたい。

「……帰るぞ」

「……おう」

俺達は女子達の声を見殺しして自分達の部屋に急いだ。だって疲れんじゃない。

その後、部屋に行った俺は荷解きをし、そのままボタンとベットに倒れ込んだ。ゆっくりと心地良い眠気に誘われてきたのだが……

ズドン！

バタン！

……。

ズドン！

ズドン！

ズドン！ズドン！ズドン！

近くの部屋から騒音が。部屋から出てみると、1025室の前に女子達が集まり、ドアに向かって一夏がなんか謝って、その後篠ノ之さんがドアを開けて一夏を入れた。部屋のドアは穴が開いていた。

………篠ノ之さんすご……

部屋に戻った俺はベットに飛び込み、寝ようとしたが……

ドゴス！！

人殴るような音がした。そして俺は今までのやりとりから、一夏がバカをしたと判断。俺は気にすることなく夢の世界へダイブした。

………

「んむうゝ……」

とても眠い。それこそあと数日は優に眠れるくらい。噓。あと5時

間くらい。

時計を見る。あまり時間は無かった。着替えて、身嗜み整えて、朝食取って。それぐらいだろう。そんな事を考えていたら…

グウ…

「……早く、食べないと……」

どうも身体は正直らしい。

side out

side 一夏

「なあ……」

「……」

「なあって、何時まで起こってるんだよ」

「……怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

にべもない。

因みに今は入学式翌日の朝8時。1年生寮の食堂だ。相変わらず右を見て左を見てても女子。職員まで全員女性なんだから恐れ入る。当然と言えば当然だが、神薙からしたら日常茶飯事も良いとこなのだろう。

そして俺は『同じ部屋のよしみ』とやらで、こうして箒と同じテーブルで朝食を取っているのだが、昨晚からこっちまともに会話が成立しない。

因みに俺のメニューは和食セット。ご飯に納豆、鮭の切り身と味噌汁。ついでに浅漬け。結構うまい。あれだろうか、血税で作られているからだろうか。国立万歳。

因みに箒も同じメニューだ。日本人ならやっぱり朝食は白米に限るいや、パン食も好きだが。しかしこの鮭妙にうまいな。塩味が程良くて箸が進む。ご飯もふんわりホカホカだ。素晴らしい。電気ジャ―でこの食感は出ないだろうか、まさか釜戸飯だろうか。

「箒、これうまいな」

「……………」

無視された。が、賛同するように箒も鮭をつまんでいる。

「ねえねえ、彼が噂の男子だって」

「なんでも千冬お姉様、弟らしいわよ」

「えー、姉弟揃ってIS操縦者かぁ。やっぱり彼も強いのかな？」

筭の不機嫌もそうだが、これも昨日と変わらない。周りでは女子が一定の距離を保ちつつも“興味津々ですよ。でもがつつきませんよ”と言わず痒い気配の包囲網。これがもし沖合漁業だったらさぞかし大量だろう。……よし何の意味のない例えだった。

「なら、言つな馬鹿」

昨日に引き続き、よく聞きなれた声。勿論、主が誰だか検討が付く。俺につられて筭も後ろを振り向く。しかも結構驚いてる。

「よう、神薙」

「おはよう。一夏、篠ノ之さん」

「あ、ああ、おはよう…」

まあ、そうだろうな。こいつは元々気配消すの得意だから気付かれた事殆ど無い。但し、千冬姉には気付かれてた。今更ながら、千冬姉って凄い。

そしてこの場の俺と神薙を除く全員が驚いてるだろう。何故か？理由は1つ。神薙が人懐っこい笑みを浮かべているからだだろう。

俺は何度となくこいつのこういう所を見た事あるが、基本的に知ってるのは俺と弾と鈴だけだろう。

因みに神薙の朝食は、クロワッサンにジャム、オムレツと温野菜、そして牛乳だった。神薙はれっきとした日本人だがヨーロッパでの生活の方が長いらしく、故に朝食は和食より洋食派だ。

「隣座つても大丈夫か？一夏」

「おう、いいぜ」

俺が言くと神薙はゆっくり歩く、それこそ“とてとて”とまったりした足取りで。そしてぽすっと椅子に座る。

「いただきます」

“頂きます”を言くとクロワッサンを千切って口に運ぶ。満面の笑みでオムレツを一口。その後温野菜を一口。

「おいし〜な」

見てるだけで癒される気がするの俺だけだろうか。いや、違う。この食堂全体がほんわかムードに包まれているみたいだ。

「ああ…昨日の師鳳くんも良いけど…」／／／／／

「今の師鳳くんもいいね〜」／／／／／

「あの笑顔…癒される〜」／／／／／

「まさしくアレが“天使の笑み”ね…」／／／／／

「……………」

筈の顔も少なからず、何時もより緩んでいた。そして俺が見ていた事に気付くと、慌てて顔を逸らし、またこの素晴らしき朝食を食べ始めた。

「し、師鳳くん、隣いいかなっ？」

「ん〜？」

神薙の隣を見ると、朝食のトレーを持った女子3名が神薙の返事を待っている。

「いゝよゝ。ハムッ！むぐむぐ……」

神薙はまたクロワッサンを一口。3人の内、声をかけていた女子は安堵の溜め息、後ろの1人が小さくガッツポーズ、最後の1人は頬が緩んでいた。

「ああゝっ、私も早く声かけておけば良かった……」

「まだ、まだ2日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわよ」

「織斑くんなんか、昨日の内に部屋に押し掛けた子もいるって話だよー」

「なんですって!？」

……ああ、うん、そうだよ。1年生が8人、2年生が15人、3年生が21人自己紹介に来たよ。名前覚えるだけで一苦労だった。因みに今“私の事覚えてる？”と言われたらの中率は2割を切るだろう。無茶言っな。

そしてその内約8割が神薙の部屋を聞いていた。

「うわ、織斑ちゃんと師鳳くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「俺は夜少なめ取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

「僕は、昼も夜もこれの8割ぐらいだから何時もこれくらい」

因みに俺も神薙も本当だ。長年色々試行錯誤したが、体型と健康維持に最も無駄がない。元々は千冬姉がしているのを真似しただけなんけども。神薙は昔っからこれらしい。やっぱり自分の身体のことを良く解ってるからだろう。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

3人のトレイの上のメニューこそ違うが、飲み物1杯にパン1枚、おかずが1皿（しかも少なめ）だった。

「わ、私たちは、ねえ」

「う、うん。平気かなっ？」

なんとなく燃費の良さだ。ISが女しか使えない理由って実はこれなのか？

「……馬鹿、千冬さんと……篠ノ之さんは……どうなんだ」

何時の間にか朝食を食べ終え何時もの“無言神薙”に戻っていた。……って、確かにそうだな。うん、明らかに矛盾点だ。

「……じゃあ……お先」

「おう、また教室で」

「……………」（コクン）

無言、無表情で頷きトレーを返しに行った。

「……織斑、私も先に行くぞ」

「ん？ああ。また後でな」

更に箸まで食べ終え、席を立てて行ってしまう。バイキングとあつてか、ここぞとばかりに和食しか選んでいなかった。相変わらずのサムライぶり。古き良き日本の伝統。大和撫子というやつだな。いやよく知らないが。しかしルームメイトが箸とは。いやまあ、全く面識の無い女子と暮らすよりはいいか。

俺と箸は幼なじみだ。小学校1年の時に千冬姉の付き合いで剣道場に通うことになってから、4年生まで同じクラスだった。

とある事情で親のいない俺と千冬姉は、よく篠ノ之夫妻に夕食に招いてもらっていた。正直、貧乏だったので大いに助かった記憶がある。

しかし何も最初から仲が良かったわけではない。むしろ、悪かったけれどそこは同じ道を歩むもの―剣道をするもの導師という事で次第に打ち解けていった（気がする）。

あんまりよく覚えてないんだよなあ。昔のこと……

まあ、俺に限らずみんなそうだろう。昔は昔、今は今。

……そう言えば、神薙って昨日千冬姉が色々カミングアウトしてたけど、やっぱりよくわかんないな。たった1年、されど1年。同じ学校、同じクラスで過ごした。そして帰った。突然に、何も言わずに俺達の前から消えた。最後に会った時、あいつは珍しく笑った。寂しげに、楽しげに、そして、3年生になった始業式の日、あいつは来なかった。

side out

side 神薙

今俺は人気の無い教室の中で自分の席に座っている。勿論小説を読みつつ、今日は携帯音楽プレーヤーで音楽聴きながら。

うん、静かって最高。これ程自分の世界に浸る事が出来るのはIS乗ってる時以外にこれぐらいだろう。

今読んでいる本は世間一般には“ライトノベルズ”と呼ばれているものだ。シリーズ物で一応全巻揃えている。自分の部屋に行けば古典だろうがミステリーだろうがホラーだろうが、なんでも揃っているため、軽い“書庫”のような状態だ。

少しして、ぞくぞくとクラスメートが入室してきた。時間を見ると既にSHLの時間だった。

…… 今日も1日頑張りますか

……

- 結論。一夏は既にgive upのようだ。

2時間目が終わった所で既に一夏はグロッキーになっていた。

なんだかんだで俺は寝てても大丈夫な程度の授業内容。一応、ノートは取ってるが。

現在、山田先生がISの基礎知識を教えている。

「と言う訳で、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これは心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ……」

「先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体の中いじられてるみたいでちょっと怖いんですけども……」

1人がやや不安げな面持ちで尋ねる。

「そんなに難しく考える事はありませんよ。そうですね、例えば皆さんブラジャーを……」

そこから先は聞いていなかった。なんとなく先が読める。

山田先生が解説する。

←
一夏と俺がいる事に気付く。

山田先生が慌て誤魔化す。

←

教室が変な空気になる。

←

千冬さんがその空気をシャットアウト。

←

山田先生が慌て始める。

←

クラスメートが質問する。

←

山田先生が解説する。

の繰り返しだろう。俺は小説を取り出し、音楽プレイヤーのスイッチをONにした。

あろう事が、周りから視線を感じる。むず痒い空気、やっぱり合ってたらしい。

キンコーンカーンコーン…

「あつ。えっと、次の時間では空間におけるIS基本動作をやりますからね」

どうやら終わつたらしい。俺は小説をしまい、プレイヤーのスイッチを切り、次の時間の用意を始めた。が…

「ねえねえ、師鳳くんさあー!」

「はいはい、質問しつもん!」

「今日のお昼ヒマ?放課後ヒマ?夜ヒマ?」

クラスメートに囲まれた。質問の嵐。休み時間が始まりを告げた瞬間に、どつと俺と一夏の所に集まってきた。

一夏は案の定、同じ様な事を質問され、返答に困っているみたいだ。そして篠ノ之さんの方へ向くがそれを篠ノ之さんが無視。そして俺はというと…

「師鳳くんの好きな物って?」

《綿毛布、猫、本、昼寝、静かな所etc》

「誕生日教えて!」

《8月15日》

「昼ヒマ?放課後ヒマ?夜ヒマ?」

《基本的に暇、夜は早く寝るから無理。来るなら放課後、昼は昼寝

するから無理》

「師鳳くんのタイプってどんな人？」

《…のーこめんと》

『えっっ！』

鞆から出したウルトラPCで打って受け答え。聞かれた質問とその返答を打ち込んで見せる。だって話すのかったるいから。えっ？打つ方がかったるいって？俺は打つ方が楽なの！

「ホントに教えてくれないの？」

「簡単に、簡単にでいいから！」

『お願い！師鳳くん！』

「……………」

むむむっ！コレは困った。特に色恋沙汰は只でさえ無関心＆無知識。更に女性の涙目とか上目遣いとか苦手なんだが…

…コレは言った方がラクになるのか？はたまた言わずが勝ちなのか？

「……………」

『……………』

俺：顔無表情、内心困惑と焦り

周りのクラスメート：心からの期待の眼差し

しかし、その均衡は意外な物で崩れた。

スパァン！！

「休み時間は終わりだ。散れ」

前から誰が叩かれる音、間違い無く一夏を叩いた千冬さんの出席簿だろう。

それを合図に俺の周りにいたクラスメートが自身の席に着いた。

………

放課後になり、今は剣道場。何故いるかって？“一夏の為にISの訓練をする”みたいな事を言っていた篠ノ之さんが、一夏と剣道で手合わせしてるからだ。因みに俺も胴着と袴を着用、髪は後ろで束ね、両手には小太刀サイズの木刀が。そして目の前では…

「どういう事だ」

「いや、どういう事って言われても……」

剣道の手合わせを始めて10分、結果は一夏の一本負け。篠ノ之さ

んはかなり怒っていらっしやる様子。代わって一夏は尻餅ついて面を脇に抱えていた。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

「……中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

一夏って確かに部活やってなかったな。見事なまでにやってなかった。なんでも“家計を助けるためにバイトをした”らしいが…

「……なおす」

「はい？」

「鍛え直す! I S 以前の問題だ! これから毎日、放課後3時間、私が稽古を付けてやる!」

実質上の死刑宣告。さて一夏、地獄を思う存分たゝゴホンゴホン、何やら篠ノ之さんからキツイ目線が…

「……今、失礼な事を言われた気がするのだが」

俺、知らんぷり。それが延命への近道デス!

……それはそうと、俺も部長の人と手合わせをしようか。さっきお願いしたら快く承けてくれた。勿論、完全な本気で来るように、俺と部長さんは面も胴も籠手も無い。自分の身を守る物は薄い胴着と

袴、そして木刀だけ。

「……………お願いします」

「お願いします」

面と向かって構える。

部長さんは標準より少し長めの木刀を下段の構え。俺は2本の小太刀を右手を逆手、左手を順手に持つ。

身長差は10?程、明らかに体格では俺が不利。

「始めっ!」

スッ…

右手を引いて左手を出し、一直線に部長さんとの差を詰める。

「真っ向から来ても…リーチの長さで私が勝る!」

部長さんが右後方に、刃先を下に向けたまま木刀をずらし、体勢を前屈みに。居合いに似た構え。

リーチの長さから、下手に接近するのは自殺行為。故に…突っ込む!

「……………」

体勢を更に落とし、最大の脚力で床を蹴り、間合いを詰める。

「はああああ!」

部長さんの射程圏に入り、部長さんは一気に木刀を切り上げる。

……俺はそれをねらっていた。

引いた右手を前に出し、更に前に押し出して木刀に当てて受け流し、軌道をそらせる。しかし、強引にそれを戻される。ならば…

フツ……バキッ！

「！！！！！？？」

右手をそのままに、木刀の方へ体を向け、左手でその木刀を挟み込み、折る。最後に向きを変えた勢いで体を捻り、右手を喉元に、左手を心臓の位置に当てる。

カラン…カランカラン…

折った木刀が俺の後方で落ちた音がする。

「ま、参りました……」

「…ありがとうございます……」

小太刀を離し、姿勢を正して一礼。

「……あつ…し、勝者！挑戦者、師鳳神薙！」

『きゃあああああ！！！！！！』

審判の判定に、周りのギャラリーが黄色い声に湧く。

「し、師鳳…お前強いな…」

「凄いじゃないか神薙！」

「……どうも」

篠ノ之さんと一夏が声をかける。

「いや〜…参った参った。こうもアツサリやられちゃうとは…動きも全く見えなかったし……流石はEU代表だね。私の完敗だよ」

「…ありがとうございます…」

その後、よく体をほぐして寮に戻った。その日の訪問者数は優に30人を超え、いずれも俺には嬉しい言葉だった。

………

一週間後、3人は第3アリーナ・Aピットの中にいた。

「――なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「気の所為かもしれないんだが」

「そうか。気の所為だろう」

「ISの教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……………」

「目をそらすな」

俺はあの後、アリーナが解放されてる時に練習試合などをしており、2人の事はよく解らないが、どうも一夏が教わったのは剣道だけで、ISの事はサッパリだったらしい。

「し、仕方がないだろう。お前のISも無かったのだから」

「まあ、そうだけど…………じゃない！知識とか基本的な事とか、あったらろ！」

「……………」

「目をそらすなっ」

なんとも漫才じみたやり取り、お前らお笑い目指すといいよ。

…………実際の話、一夏のISはまだ来ていない。色々大変そうだが、

俺が先に出るためフォーマットとフッティングは何とかなるとか。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

そうこうしていると山田先生が駆け足でやってきた。今日は何時にも増して慌てふためいている。

「山田先生、落ち着いて下さい。はい、深呼吸」

「す〜は〜、す〜は〜」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

一夏の言葉に本気で従った山田先生の顔は段々と酸欠に赤くなっていく。

「……………」

……この人、冗談通じないな。

一夏と目があつた時に思ったことだ。

「ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

うん、止めるタイミングを見失っただけだと思います。
故に…

スパァン！！

『目上の人には敬意を払え、馬鹿者』

千冬さんと同時に頭を叩いた。今月に入って既に4回目、個人個人の集計をすれば優に30回を超えるだろう。

「千冬姉…」

スパアン!!

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなければ死ね」

うわぁ…容赦ねえなあおい。しかも教育者としてはあまりに見過ぎせない言葉。美人なのに…この性格の所為で台無しだ。勿体ないなあ。

「ふん、この馬鹿な弟にかける手間暇がなくなれば、見合いでも結婚でもできるさ。はぁ…コレが師鳳みたいに世話の焼けない弟なら、どんなにいいことか…」

Wow! 読心術とかすげえ!! 俺、何時も無表情なのに解るんだこの人。恐ろしいことこの上ない。てか俺が世話の焼けない人とか…ただ単に無口で言われる前に自分で大体の事をやっちゃうだけですが…

「そ、そ、それですねっ! 来ました! 織斑くんのIS!」

「織斑、すぐに準備しろ。アリーナの使用出来る時間は限られているからな。ぶつつけ本番ものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ。一夏」

「え？え？なん……」

『早く！』

「……………」

一夏も大変だな。3人に急かされて…

ゴゴン…

ピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒していく。

……そこに【白】と、一回り小さい【茶色】がいた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。

一方は見慣れた茶色。所により白。2日ぶりの再開。

「これが…」

「はい！織斑くんのIS【白式】と、簡易メンテナンスに出していた師鳳くんの【インパルス・イーグル】です！」

「……………」

無口でインパルス・イーグルに近付き、それに手を触れる。中身を大幅に改編し、更に機動力とスピードを向上させた【I-BOOST・ver.3.50】はちゃんと組み込まれていた。

「師鳳、システムと装備の方は大丈夫だったか？」

「……………はい」

「よし、時間が詰まっている。早急にセットアップしてアリーナへ行け」

「…了解」

それだけ応えてインパルス・イーグルの中へ。ディスプレイに今のイーグルの装備、全ての数値が表示され、ピットの外にISの反応。

イギリス第3世代機、

機体名：ブルーティアーズ

特殊武装：保有

武装名：スターライトMk-?

操縦者：イギリス代表候補生、セシリア・オルコット

スペック上、向こうは中距離射撃型、対するこちらは近接格闘型。ブルーティアーズの方が有利だろう。だが、こちらもそれに対応した武装を用意してきた。負けはしない。

寧猛な猛禽類の爪、脚部スラスターを備えた力強さのある手脚、広げれば優にISの2倍の大きさになる羽根を模したショルダースラスター。ヘッドセットは鷲の羽根を模したもの。

寧猛な【荒鷲】は外見よりも威圧感と威厳を与える。

相手がどうであろうと、俺は抜かない。故に、全力だ。

体重を僅かに前に傾ける。フワリと浮き上がり、ピットの出口にイーグルを動かせる。

視界は360°に広がっている。見えている一夏と千冬さんに一言言う。

「……千冬さん、行ってきます」

「ああ」

「一夏」

「ん？」

「……勝つ……負けるなよ」

「おう！」

ゲート解放まで、残り2・05718422秒。荒鷲は羽根を広げた。狙った獲物を喰らうために。

side out

第2話 開幕！クラス代表決定戦！（後書き）

どうも、eagleです。

何とか第2話を仕上げたんですが…

……やっぱり長くなるんだよね、これが。

次回は主人公設定とIS【インパルス・イーグル】の設定です。

主人公&mp;IS設定? (前書き)

主人公&mp;IS設定です。

IS設定の方ではネタバレ(?) ですので注意して下さい。

主人公 & a m p ; I S 設定？

名前

師鳳神薙

(しほうかなぎ)

年齢・誕生日

15歳・3月3日

身長

152?

1年前の計測より2?縮んだ

体重

43?

性別

男

性格：兎に角無口。朝、寝ぼけてる時は若干天然&柔らかくなる。

特徴：艶のある黒髪が腰辺りまで。顔は幼く、同級生よりも2~3学年下の女子とよく間違えられる。

専用機

保有

機体名

インパルス・イーグル

所属

ベルギー空軍第201特殊戦闘部隊

部隊名

フェンリル

階級

名誉少佐

詳細

日本生まれのヨーロッパ育ち。日本に居たのは全て合わせても5年。残り10年はヨーロッパ。

両親との思い出、記憶等は一切無し。10歳の頃に興味本位でISに触れた途端、ISが起動、通常なら時間のかかる最適化^{フッティング}がものの1分で完了した。

これを聞いたEUは神薙を保護、当時住んでいたベルギーに空軍での教育を委任。

その2年後、IS【インパルス・イーグル】を篠ノ之束が制作し、神薙に贈与した。更に半年後、ベルギー空軍201特殊戦闘部隊【フェンリル】に入隊、初スクランブルで、テロリストの操縦している戦闘機15機のうち8機を撃墜、その後の出撃での輝かしい戦果から15歳の誕生日に名誉少佐に任命された。

神薙がIS学園に入るまでで最後に日本に訪れたのは中2の春から中2の終わりまでの約1年。留学生として一夏、弾、鈴音の通っていた中学校に編入していた。

IS設定

機体名

インパルス・イーグル
第四世代機

操縦者

師鳳神薙

開発者

篠ノ之束

カラー

通常

茶・白

【天騎煌然】発動時

金・白

装備

武装

リニアパイルバンカー【トライクラッシャー】
マルチロールショットガン【レスティアM991-HPB(Hi
Power Barrel)】
ツインダガー【雪片参型】

シヨルダー

大型高機動スラスタ―【ソニック・インパルス】

システムウェア

【I - B o o s t】↓【I - B o o s t V e r . 3 . 5 0】

単一能力
てんきこうぜん
天騎煌然

システムウェアの【I - B o o s t】とのリンクが臨界値を超える
と発動。シヨルダーのスラスタ―【ソニック・インパルス】の出力
が50%上昇、機体設計上の耐久力を大きく上回る高機動・高加速
が可能に。

また、パイルバンカー【トライクラッシャー】とツインダガー【雪
片参型】の威力が最大25%上昇。

トライクラッシャーの先端部分の頂点を使用したエネルギーパイル
バンカー【ライトニング・アンカー】が使用可能。

詳細

神薙が12歳の時にIS開発者篠ノ之束が制作した第四世代機。

他のISよりもサイズが一回り小さく、シヨルダーに装備された大
型高機動スラスタ―【ソニック・インパルス】が特徴。

【ソニック・インパルス】はピットに入っている状態な普通に見える
が、実際は鳥類の翼のように折り畳まれている。ひろげると優に
IS2機分の幅を超える。

システムウェアの【I・Boost】はインパルス・イーグルのコアの処理能力、反応速度、スラスタの出力制御をしており、インパルス・イーグルの中枢を司っている。クラス代表決定戦の3日前に簡易メンテナンスに出し、その時に【I・Boost Ver. 3.50】にアップデートされた。

インパルス・イーグルは、その加速力、機動力ではIS史上最高の性能で、単一能力【天騎煌然】を発動すれば更にその能力を上げる事が出来る。

トライクラッシャーは同時射出が可能な3弾式リニアパイルバンカー。【天騎煌然】が発動中はその3本のパイルの先端に高電圧をかけ磁力によって生まれる高エネルギー波を利用したエネルギーパイルバンカー【ライトニング・アンカー】が使用可能になる。

【雪片参型】は千冬の【暮桜】、一夏の【白式】に装備されている近接戦闘ブレード【雪片】と同じ系統。但し、上記のISに装備されている雪片よりも短く、本数は2本。【天騎煌然】の使用で【零落白夜】とほぼ同等の威力を誇るツインダガー。

レスティアM991-HPBは元々ショットガン。しかしスイッチによる切替でサブマシンガンとしても使用可能。唯一【天騎煌然】の影響は受けない装備。

待機状態

金と白の2本のリングが交わっているブレスレット。

主人公&I S設定? (後書き)

主人公とI Sの設定が面倒臭いっす! (オイ

特にI Sの方ではなんか同じようなこと繰り返してたような…

そんなこんなで次回は神薙とセシリーのバトルパートです。

お楽しみに!

(そこまで期待しなくても良いですby神薙)

第3話 荒鷲の円舞（前書き）

1ヶ月も放置しててスイマセン！
第3話です！

あと、oppのイメージはとある魔術の禁書目録？より川田まみの「
See visions」です。

第3話 荒鷲の円舞

side 神薙

「あら、逃げずに来ましのね」

「……………」

ピットから出て、ショルダースラスターの【ソニック・インパルス】を広げる。猛禽類さながらの威圧感のある巨大な羽根。羽根の先から金色の粒子が排出される。

そして唐突だが言わせてもらおう。

気に食わない。

こいつの事が気に食わない。

今すぐにでも始めたい。と言っても、試合開始のブザーは既になっていた。つまり、今すぐ始めても問題は無い。

しかし、向こうは未だに始めようとし無い。

「ここに来る前に【黄金の荒鷲】の噂を耳にした事がありますけれど、はつきり言って、あなたを見て幻滅しましたわ」

丁度目線が合う位置まで上昇した。

「最後のチャンスですわ」

「?」

「私が一方的な勝利を得るのは難しいかも知れませんが、少なくともあなたは私に勝てませんことよ。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝ると言うなら許してあげないこともなくつてよ」

「警告、敵IS操縦者の左目が射撃モードへ移行。セーフティのロック解除を確認。

全く、こっちの準備も済んでないのにおっぱじめようってか？

……マナーがなってねえよ屑が

「……貴様…墜ちろ」

「そう、それは拒否とつてよろしいのですね？それでは……」

「警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

10分だけ、楽しませてくれよ。屑の代表候補生。

「お別れですわね！」

キューイン！耳をつんざくような音。既に聞き慣れたものだ。

「武装展開、【レスティアM991-HPB】サブマシンガンモード、超音速速射シフト。
ソニック・ファイア

右手に閃光、一瞬で消え、手にはホロサイトスコープの付いたショットガン。

初弾到達まで残り0・014秒。

…それだけあれば充分だ。

――【I - BOOST Ver. 3・50】 Stubby: GO!

「なっ!!??」

きつとセシリアからは俺が消えたように見えただろうが、俺はちゃんとセシリアが見えてる。驚愕に染まった顔が。

セシリアの真上に飛んだ俺は、ホロサイトスコープを覗いてセシリアを捉える。

……見えた。

ズダダダダダダッ!!!!

手にあるショットガンから、連続したフラッシュマズルと発砲音。連なる20発の50mmの金属弾はセシリアの専用機、ブルー・テイアーズに吸い込まれるようにして、全弾命中した。マガジンにある残弾は10。50mm弾の予備弾倉は6。まだ楽しめそうだ。

――敵ISバリアー貫通、ダメージ125。シールドエネルギー残量、548。実体ダメージ、レベル中。

後ろに回り込んでまた10発。マガジンは空っぽ。ショットガンの弾倉を込める。ショットガンの予備弾倉、残り5。

――射撃モード、ショットガン。

この間、実に10・22714秒。割と随分早くに終わりそうだ。

セシリアが何か言ってる。でも、今の俺には何を言っているか解らない。

ポンプアクションで初弾装填、発砲。

ブルー・ティアーズが少し後ろに仰け反る。

ー敵ISバリアー貫通、ダメージ60。シールドエネルギー残量、412。実体ダメージ、レベル低。

さあ、まだ演習は始まったばかりだ。まだまだ終わらせない。

side out

.....

side???

「...圧倒的過ぎるだろ、あれ」

白式のハイパーセンサーから直にモニターへ映像が飛び込む。

「.....」

「じ、これは.....」

一夏の隣でモニターから観戦する筈は啞然とし、山田先生も愕然とした表情を隠せないでいた。

「あれが、本当に神薙なのか……？」

「……信じられないか？」

一夏の呟きに千冬が聞く。

「当たり前だ！……じゃない、当たり前です！あんな荒れた、一方的な神薙は見たことありません！普段のあいっはもつと穏やかで、静かで、少なくともこんなやつじゃなかった筈です！」

「そうか……ならば織村、お前の見た師鳳は“表”の師鳳だ」

「“表”の……神薙？」

懐疑的な一夏の態度に千冬がモニターを見ながら話す。

「確かに師鳳は寡黙な上に無表情、静かな場所を好むような物静かなやつだが、一度スイッチが入るとどうにも、徹底的に相手を叩き潰そうとする。今もそれに当たるだろう。しかも、この試合自体をただの練習、現時点で軽いウォーミングアップとしか捉えていない筈だ」

「……何故だ神薙。何でお前は……」

一夏はモニターに目を移した。

s i d e o u t

s i d e 神薙

「……11分21秒…持ったな」

「ハア…ハア…クツ！」

シールドエネルギー残量は309、実体ダメージは低。対してセシリアの駆るブルー・ティアーズはシールドエネルギー残量、91。実体ダメージ中破。かなり体力を消耗したらしい。

「全く……歯が立ちませんわ…！」

悔しそうに顔を歪める。

サイレント・ゼフィルスに同じく、空中にフィン状のBTが浮いている。

武装名、ブルー・ティアーズ。

コレがこの機体の名前にもなっている。イギリスの開発したBT搭載の第三世代機の1つ目。

機体は優れた性能を保持しているが、問題はセシリアの実力。

悪い訳ではないのだが、うまくBTを使いこなせていない。

BTには偏向射撃^{フレキシブル}が可能なのだが、セシリアはまだ使えないらしく、複雑に入り組んだ射撃が出来ていない。そのため、数発は当たったものの致命傷には達していない。

「まだ…まだですわ！」

セシリアがBTを振るう。

……そろそろ終わりにするか。

4つのビットに狙いを定める。弾倉にはショットガンの弾丸。ホロサイトスコープの範囲内に入る。

ズバン！！ズバン！！

一発放った後直ぐにポンプアクションで装填、二発目を放つ。
ホロサイトスコープに映るビット全てが火花を散らして墜ちる。

隙だらけのブルー・ティアーズに詰め寄る。

「フッ…おあいにく様、ブルー・ティアーズは「6機あってよ…」
なっ…」

発射されたビットは、サイレント・ゼフィルスに同じくミサイルビット。スコープを見ずに2発、破壊。

「……墜ちろ」

ー【レスティアM991-HPB】武装解除。【トライクラッシャー】ワンオフアビリティ右腕展開、単一能力【天騎煌然】発動時間0.55秒、【ソニック・インパルス】出力25%

苦し紛れの射撃。必要最低限の回避運動で更に近付く。

トライクラッシャーの射程圏。命中率96%、撃墜率98%

セシリアの目には見えただろう。金色に光る鷲が自らの爪を自分―
ブルー・ティアーズに撃ち込む所を。

ブルー・ティアーズは爆裂音と共に地面に叩きつけられる。セシリ

アは操縦者を危険から守る、ISの機能【絶対防御】が働いてるから問題無いだろう。

土煙が晴れる。アリーナの地面にクレーターができ、青い破片が周りに散らばり、真ん中に気絶したIS操縦者がいた。

ビーーーーーー!!

“試合終了。勝者、師鳳神薙”

画面上に表示された俺の名前。観客席は完全に沈黙して、声一つ上がらなかった。

このアリーナの中に気絶したまま放置は流石に俺でも気が引ける。セシリアを上体と足を抱えてピットに戻る。つまり、お姫様抱っこ状態で抱えていることになる。

スパァン!

「少しは手加減をしろ、馬鹿者」

「…すいません…」

着いてそうそう千冬さんの十八番【出席簿アタック】を食らった。千冬さん、痛いです。

「か、神薙…お前強いな…」

「……………」(フルフル)

篠ノ之さんに言われたことを首を振って否定。

今の俺よりも何倍も強い操縦者は世界に山程いる。例えば……目の前の教師（千冬さん）とか、ここの生徒会長とかがいい例だな。

「え、え……と……セシリアさんのISが大破してしまったので、織斑くんは神薙くんと試合をして下さい。神薙くんはシールドエネルギーが回復してからアリーナへあがって下さい」

「はい！」

「…………」（コクリ）

「神薙」

千冬さんが俺の名を呼ぶ。

「神薙、お前は次の織斑との試合、トライクラッシャーを使うな」

「…………」

これにはなんとなく予想が付いた。

「I - BOOST Ver. 3.50との臨界率、【天騎煌然】の稼働率にリミッターを掛けさせてもらった。通常よりも発動時間も機動力も落ちているからな」

…………。

…………それなんて拷問ですか？織斑先生。

言いたい事は大体解る。

まず、トライクラッシャーをぶち込めば、幾らしっかりと最適化が出来ていたとしても、今の一夏なら一瞬で墜ちる。だからボツ。

次にイーB O S S T。通常でも制限掛けてるのに、更にリミッターを掛けますか。イーグルの得意分野の高機動が潰された。

そして最後に単一能力。あれにリミッター掛けられると、ツインダガーのバリア無効化攻撃の威力が落ちる。一夏の白式の初期装備が雪片式型しかないから、俺も同じヤツ（・・・）使おうと思っただのに……

ついでだから他のものがどうなっているか、展開するウィンドウとディスプレイを見る。

どうやらソニック・インパルスにもリミッターが掛けられているようだ。

「師鳳くん、シールドエネルギーの補充が完了しました。アリーナの中に行って下さい」

「……………」（コクン）

「今度は手加減しろ。さもなくば……………お前の首を狩る」

「……………！！」（コクンコクン）

千冬さん、眼がマジでしたよ！殺気ガンガンでしたよ！？しかも現在進行形！あなた教師としてどうかとおもつよその態度は！！？

……………ふう〜…さてと、第二幕と行きますか。

ハイパーセンサーが一夏と白式を捉えたまま、第1試合と同じ様に飛ぶ。

視界が白く開けると、銀の屋根の向こうに青空が広がっている。ア

リーナのモニターには

- 第2試合、師鳳神薙VS織斑一夏

の文字が浮かんでいた。

視線を下げると、既に雪片式型を展開していた一夏がこちらを見ていた。

「神薙、本気で行くぜ！」

……来い。……その本気…受け止めてやる。

- 武装展開、ツインダガー【雪片参型】。【IIBOOST Ver.3.50】【ソニック・インパルス】、リミッター上限まで出力開始。

ゆつくりと血の巡り始める感覚。鉄の塊に魂が宿り、その時から、
イグルISから鷲（EAGLE）になる。

ビーーーーッ!!

試合開始のブザーと共に、甲高い金属音が鳴り響く。

- to be continued

第3話 荒鷲の円舞（後書き）

どうも。これを約1ヶ月も放置してた駄作者です。

今回は神薙とセシリーのバトルパートをお送りしました。

元々駄文なのに苦手分野で更に悪化、目も当てられないです、はい。

そんな訳で、次回は一夏との一戦です！果たして勝利の女神はどちらに微笑むのか！？

第4話 2つの雪片（前書き）

すいません。

若干主人公のキャラが変わります。

自分の文章構成能力に苛立ちを覚えます。

そんなこんなで第4話です。

第4話 2つの雪片

side一夏

シールドエネルギーを回復し終えたらしく、ピットから神薙が出て来た。

第1試合での圧倒的なスピードと至近距離での破壊力に、今でも足がガクガクする。

俺の白式は近接格闘用ブレード【雪片式型】しかないが、神薙のISの武装はまだ現時点で4つ在るらしい。
が、まだ2つしか分からない。

1つはサブマシンガンにもなるマルチロールショットガン。もう1つはほんの一瞬しか見れなかったが、ISを一撃でバラバラに出来る程の破壊力を持つパイルバンカー！。後2つが何なのか分からない。だけど半端な物ではないだろう。

今の自分に出来る最高の一撃を喰らわす。それがこの試合なので俺のノルマ。雪片式型を呼び出して、精神統一する。

……^{コイツ}白式は俺の身体となり、^{アイツ}雪片式型は俺の腕となり……偉大な姉の弟である前に、一日本男児で在るように……

正々堂々と、全力で。

「神薙、本気で行くぞ！」

それに答えるように神薙が武器を呼び出した。
眩い閃光が消えたと共に、白式のハイパーセンサーが表示したものは、

- 敵IS機名、インパルス・イーグル

操縦者、師鳳神薙

特殊武装、保有

武装名、ソニック・インパルス

展開中武装、ツインダガー・雪片参型。

雪片が、2つ…！？

その驚きの中で、試合開始のブザーが鳴り響く。

- 第2試合、織斑一夏VS師鳳神薙、試合開始。

side out

side 神薙

雪片参型。

それは名前の通り、モンドグロッソで優勝した織斑千冬のIS【暮桜】と千冬の弟、織斑一夏のIS【白式】に組み込まれていた武装【雪片】の兄弟であり、似て非なるもの。

暮桜と白式の雪片はシールドエネルギーを使用した【バリア無効化攻撃】が可能であり、それが唯一の技。また、バリア無効化攻撃には大量のシールドエネルギーを消費する為、使用時間が短い、防御

が手薄になる等のデメリットが大きい。
諸刃の刃とはよく言ったものだ。

代わってイーグルの雪片参型は同じバリア無効化攻撃が可能。更に2本で1つの双剣である。そしてこの雪片はシールドエネルギーを多く消費しない。イーグルの単一能力【天騎煌然】を使用時のみ可能になっているからだ。

しかし、先の雪片とはリーチの差で劣る。コレが唯一で最大の欠点だ。更に、参型のバリア無効化攻撃は暮桜と白式のそれよりも威力が低い。飽くまでも、「手数で勝負」の双剣のそれに則っている。

雪片式型を構えた一夏の白式は、先程と大きく外見が変わり、西洋の騎士甲冑を彷彿とさせる滑らかな曲面と純白の美しいボディとなっていた。

握りしめている雪片式型は目測で約1・7～1・9m。
対して雪片参型は1m弱。2本で良かったと改めて思ったり思わなかったり。うん、自分どっちつかず辞めような。

さて、ブザーが鳴って約1分。そろそろ始めますか。

「一夏……行くぞ」

「あ、ああ……来い！！神薙！」

両手の参型を逆手に持ち、前で腕をクロスさせる。対して一夏は式型を中段の構えにして真っ直ぐ此方を見る。

目を閉じて意識を切り替える。

観客席の声すら聴こえない静寂な時。目の前の一夏に意識を集中させる。呼吸と心拍の音がゆっくりと流れる。

- - 今だ！

目を見開いて一夏との間合いを詰める。肘を曲げて、参型の切っ先を両方共一夏に向けたまま。

それと共に一夏も距離を詰める。軽く斜めに降り、刀身を右に倒して加速する。

間合いの目測が5m弱になったところで、右手首を縦にして参型の刃を下に向け、一夏の弐型を止める。

「はあああああ！！！」

しかしやつぱり、こっちよりも大振りの弐型を、しかも両手でしっかり構えている一夏の斬撃に力負けし、右手首が前倒しになる。つまり、弐型の刃はこちらに迫っている事になる。

……… 当たり前だ。こっちは片手首、向こうは両手。常識だし、誰に聞いてもそう答える。敢えてそうなるように、自分からそうしたのだから。

倒れた右手首をそのままに、俺は体を右に交わして左手を一気に外に向けて振るう。

「！！！？？」

その為、左手の参型は一夏に突き刺さり決るような軌道を描き、交わす為の軸にした右手に全ての力を受け流された一夏は、必然的に

その軌道上に来る。

「まず…一撃…」

ガギン！と金属が金属に打ち付けられ、凹まされたようなような鈍い響き。

「ぐうッ！！！」

――敵ISバリアー貫通、ダメージ189。シールドエネルギー残量、371。実体ダメージ、レベル中。

即座に次の攻撃の体勢になる。今度は両手とも順手に持ち、左手を腰に、右手は切っ先を左に向けて前に出す。

一方の一夏は先程の一撃で体勢を崩し、地面直撃寸前になんとか立て直した。顔に「何が起こった！！！？？」と書いてある。

そして何処からか強い殺気をひしひしと感じる。もしコレが何らかの攻撃手段だとすれば、軽く地球は吹っ飛ばせるだろう。よく分からないけど。

まあ、千冬さんならやりかねんだろうが。

そんなつまらん思考を働かせているうちに一夏が突っ込んできた。左足を引いて体を捻る。

目測3mまで引き付ける。勿論向こうの射程圏にも入るため、ミスなんざ許されない。一夏が弐型を上段の構えから一気に振り下ろす。対して俺は体ごと右手を振り、一夏の攻撃を防ぐ。と、共に左手を出来る限り早く突く。

しかし、一夏はそれを読んでいたのか、右手を弾いて距離を取る。左手の突きを空振った俺に隙が生まれ、直後の横薙の斬撃を防ぐ手

立てすら無い為それに直撃し、軽く20m吹っ飛ばされた。

ーバリアー貫通、ダメージ200。シールドエネルギー残量、352。実体ダメージ、レベル小破。装甲2箇所破損。^{ディフェンス}防御力、16%ダウン。ソニック・インパルス、出力25%ダウン。

やけに俺の食らうダメージが多い理由。それは、かなり攻撃と機動力、加速力にエネルギーを割いているため、極端に防御に回すエネルギーに余力が無い。従って、クリーンヒットすれば必然的に大ダメージを負う、と言う事だ。

しかし……この一撃はデカいぞ。俺としては、もう一発ぶち込まれたら確実に負ける。

ここは、アレ（・・・）使うつきゃないな。

広げていたソニック・インパルスを閉じ、エネルギーを局部に集中させる。加速、機動に特化したイーグルだからこそ出来る芸当だ。これにより、シールドエネルギーの消耗を押さえることが出来、加速も常時と変わらないが、機動力が28%も落ちる。また、完全な状態だった場合、イーグルの設計限界の加速と最高速^{ダッシュ}をも^{トップ}ものの数秒でぶっち切る。勿論、機動力は格段に悪くなるが。

全く…イーグル（俺の）も白式（一夏の）と同じ、諸刃の刃だよ。

因みに、コレ作った本人にそのデータを送ると、

「うつわあゝ…コレは私でも計算外だっわ…でもでも、私良いことしたよね？性能が高いに越したことは無いよね？だからさだからさ、今すぐ行くからさ、いっぱい抱き締めさせて！！いっぱいいい子いい子してー！！」

つってマジで基地に来やがった事があった。そしたら到着そうそう抱きつかれた。しかもそれだけじゃ飽きたらず、kissまで要求しやがった。勿論、してないけど。頭撫でるだけしか。

……まあ、そんな暴露って程じゃない暴露話は置いて、これをするには余程の事でリミッターを解除されない限り、ソニック・インパルスの出力が15%以上落ちないと発動しない。
そして、この事を俺と開発者とSランク関係者はこう呼ぶ。

ソニック・インパルス
――S I出力低下に伴い、発動しますか？

眼前にその文字とYES/NOの二択。迷わず選ぶは「了承」意を込めた3文字。

――YES・

――了解しました。発動します。

『Mode・>S・C(Sonic・Cruise)<』

side out

side???

機体のエネルギーの流れが変わる。出力を一点に引き絞り、エネルギーを最後の一滴まで使い果たせるように。

（機動が先程よりも直線的になり読みやすくなるが、そこはスピードと参型の最強技でカバーするしかない。但し、数少ないチャンスをモノにするしかない）

一夏がまた神薙に突っ込んでくる。

（このまま棒立ちになって迎撃なんて真似もモードSCこれになってからじゃ出来る筈もない。だから俺は一夏同様……）

神薙は一夏に突っ込む。

一気に最高速まで加速し、左を逆手、右を順手。正々堂々と真正面からぶつかり合い、その度に離れ、またぶつかり合う。

響く甲高い金属音。火花を散らしあう式型きよう・参型だい。それを操る白式（騎士）とイーグル（大鷲）。その2機を駆る2人の男子。

アリーナ全体が魅入っていた。

side out

side 千冬

全く… 2人して単純な攻撃しかしてないな。一夏ならまだしも、神薙まで回避しようとせずに真正面からぶつかっているとは。お陰で2人してエネルギー残量がギリギリまで減っている。

……まあ、それだけ神薙も一夏もこの試合を楽しんでいるらしいしな。観てるこっちも清々しいくらいに面白い。気持ちのいいものだ。

話を反らす、第一試合前に神薙の武装を確認した。が、アイツは何故、雪片参型あんなものを組み込んだんだ？まだ出していない物に関しては……はあ、呆れて何も言えん。確かに仕組みも威力も桁違いだが、あれは普通の武器とは言い難い。寧ろ武器とは言わない。敢えて言うなら、最悪の場合は「自殺用重火器」。最良の場合は「大隊殲滅戦術主体重火器」だろう。

こんな無茶苦茶な物を造るアイツもそうだが、これに乗っけるとG.Oサインを出した神薙も、余程の大馬鹿と見た。

さて、馬鹿共の試合もそろそろ終わりだな。2人のエネルギー残量は……

山田先生が操作するモニターを注視する。

織斑一夏/白式

シールドエネルギー残量：76

師鳳神薙/インパルスイーグル

シールドエネルギー残量：68

僅差もいいところ。チャンスは一回、一撃で仕留めなければ、負け

る。

2人の打ち合いも止まって、互いに対峙している。

「IS操縦者として2人がどう出るか…見物だな。」

side out

side???

「はあ…はあ…」

ぴたりと止んだ斬撃の応酬。
対峙する騎士と鷲。

第二試合開始から35分。一夏の白式も神薙のインパルスイーグルも既にエネルギー切れ寸前。互いに放てる攻撃は一発。

神薙は無表情に、しかし口振りの少し弾んだ様子から楽しんでいるのが一夏にも分かった。

「一夏」

「ん？」

「今……俺は、最高に……楽しい」

「俺もだ」

「にもかかわらず……そろそろ、お開き。…どつ？」

輝く瞳を一夏に向ける。

「非常に残念だ」

一夏も目を輝かせて、少し惚けて答えてみせる。

「でも、しょうがないよな。もう時間らしいし、これで決着つけなきゃならないし、元々クラス代表決めるための試合だし」

「……そう、だな」

神薙が参型を順手に持つ。しかし、左手一本だけで、右を消した。

「決着……付けようか」

瞬間、イーグルが変わる。白と金色の【荒鷲】に。

「ああ。決着、付けようぜ！」

弐型を握る手に力が入る。

「いむ」

神薙が前傾姿勢になり、左腕を水平に上げる。

「尋常に」

一夏も構えるは居合いの構え。姉に教わりファースト幼なじみに学んだ【一閃二断の構え】。

『勝負！！』

同時に加速、間を詰め合う。

「はあああああ！！！！」

一夏が雄叫びを上げる。それと同時に弐型が輝く。

「……………」

それとは反対に神薙は沈黙したまま加速する。そして、参型が金色の刃を閃かせる。

アリーナにいる全員の見る光景全てがスローモーションになって目に焼き付く。

一夏が弐型を腰から抜き放つ瞬間、雪片弐型の刃が光り輝き、実体刀からエネルギー刀に変わる。

同じく神薙の雪片参型の刃も金色のエネルギー刀に変わる。

長さは共に約1・8〜2・0m程。幅は弐型^{あに}より参型^{おとこ}の方が数？細かい。

「ううおおお!!!」

光り輝く両刃がぶつかり合う。

「!!!!」

神薙の参型が弾かれ、神薙の手から離れる。

「はああああ!!!!!!」

振り抜かれた弐型がてっぺんから縦に真っ直ぐ振り下ろされる。
しかし……

神薙は不敵に笑った。

「!!??」

その振り下ろされる数瞬の間に出されたのは、もう一本の参型。

右手に持ち、弐型に対して右に体を捻り振り下ろされた銀の刃を交わし、実体刀のままの参型を一夏に突く。そして、それに捻りをさらに加えて、手のひらで深々と突き刺す。

砕け散った白い装甲と一緒に地面へ堕ちて行く一夏。
それを放ったままの状態で眺める神薙は呟く。

「……華辞神流剣術、はせん破尖」

地面に直撃し、土煙が舞ったところで、決着は付いた。

ビーーーー!

第二試合終了。

勝者、師鳳神薙。

『きゃああああああ！！！！！！！』

アリーナに黄色い声が響く。

「……大丈夫か？」

神薙が一夏に声をかける。

「あ、ああ。なんとか」

「……立てるか？」

一夏に手を差し出す。

「すまん、神薙」

「気にするな」

「試合……楽しかったな」

「……（コクリ）……また、やろう」

こうしてクラス代表決定戦は師鳳神薙の二戦勝利によって幕を閉じた。

因みにピットに戻った瞬間、

スパァン！！！！

何時もより数割り増しの出席簿アタックが神薙に振るわれたのはここだけの話だ。

「うぐうゝ……………痛い」

「当たり前だ。痛くしているのだからな」

「…理不尽だ」

その時神薙は涙目でうずくまっており、それを偶然目撃した生徒により盗撮され、その写真はかなりの高額で学園内で取引されている。その闇取引の正式な仲介者、もとい生徒会長はこう語る。

「彼には色々と可能性があるからね、まずは私のお嫁さんになってもらおうかな？それじゃあ、まだ取引があるからここまでだよ」

と。

……………

それから時間は流れ、夕刻。

学園の医務室のベッドにある女子生徒が目を覚ました。

彼女の名はセシリア・オルコット。1 - Aのイギリス代表候補生。着ている服はISスーツのままだ。何故彼女がここにいるのか。そ

れは今日行われたクラス代表決定戦で、ある男子生徒に完膚無きまでに叩きのめされ、気絶したからである。

「……わたくし……負けたんですね」

むっくりと上体を起こし、窓の外の夕陽に染まる茜空を眺めつつ、それを思い出したセシリアは顔を俯かせた。

（……男子に負けた。圧倒的力量的差に自分の無力さを知った。恐ろしいほどに強かった。何より、わたくしを見る目が怖かった）

思い出す度に身が震え、倒れそうになる。

「………お目覚めですか？姫」

ビクツと身を固める。

今考えていた相手の顔と同じ声。怯えながらそこへ顔を向けると……

「………」

無言でその男子は立っていた。

その男子はゆっくりと窓に近づく。

「な、なんですか？わたくしに何かご用でもあるのですか？」

「……いや、特に……」

ゆったりとした歩調で、少しずつ距離を縮めて行く。

「でっ、では！何故ここにいらっしゃるの！？」

「……迎えに来た」

窓の側に来た男子生徒はセシリアの顔を見ずに答えた。

「何の迎えですか？……まっ、まさか……わたくしに何か……」

「……無いよ。特に」

口調が変わった。何時ものような、冷徹で冷静で冷たく澄んだ、凜とした声が、柔らかく、温かく、包み込むような優しい声だった。

「そろそろ……夕食だから……迎えに来た」

「なん……で……？なんで……わたくしの事が嫌いなのでは……」

「……そんな事、言った？」

相変わらずセシリアには顔を向けない。

「だって……あの時あなたは……」

「あれは……少し、血が上ってた。……ごめん」

「！？」

顔は背けていたが、素直に謝った事に驚いた。

「貴女の……家族について、少し調べた」

「はい？」

「貴女は、貴女の両親は、数年前の大規模な列車事故によって亡くなられた。」

「……」

「貴女は事故以前の両親の姿を見て、あることを思ったそうなの？」

「……？？」

（この方…どこまで知ってらっしゃるの！？）

セシリアは気味が悪いほどに細かい情報を知っている男子生徒を見て驚いた。しかし、それよりも驚いたこと、それは…

普段ポーカークフェイスで無口な彼が柔らかい表情で饒舌になっていたことだった。

「子供の貴女に遺されたのは、莫大な資産。そして貴女は家を守るために途轍もない努力を繰り返した。適正テストでA+が計測された貴女は、政府からの国籍等の手厚い保護を受けられるのを知って、ブルー・ティアーズのパイロットになった。……違いますか？」

ゆっくりと落ちる夕陽に、空は更に赤みを増す。

「……」

その無言は肯定を意味する。

「まあ…意味は無いけど」

「意味がないのに調べたんですの!？」

「……………」(コクリ)

「意味がないのに人の過去を詮索しないで下さる!！」

「クスクス…ごめん。意味がない訳じゃ無いけどさ。何か、強いな
ゝって」

セシリアの方を向く

「全く、からかうのもいい加減にして下さるかしら……………って、強い
？わたくしが？」

「自信があるから、ふっかけてきたんだろ？」

「はへ？え、ええ、そうですね。わたくしは自分に自信があったか
ら貴女に挑んだのですわ!ですのに…ですのにわたくしは……………」

セシリアは思い出したようで顔色が暗くなった。

「気にすること無いんじゃないかな？」

その軽薄そうな言葉にセシリアの顔色がまた変わった。

「ど、どという意味ですの!？」

「そこまでがつつかなくても……………」

「わたくしを侮辱する気ですの!？」

「いやだから、そうじゃなくて、折角こんな設備の整った場所で、優秀な先生がいるんだし、俺もまだ未熟だし、一夏に關してはまだまだし……どうせだから、一緒に強くなる？俺たちと一緒に」

無邪気に笑って手を差し出す。窓の外から差し込む赤い夕陽と星空のグラデーションが、男子生徒の子供っぽい笑顔が不思議と色づばく見（魅？）せる。

「……………」

しかし、セシリアは何故か手を取らなかった。顔を真っ赤にして。

「どうか、した？」

顔を覗き込む。

「な、何でもありませんわ！」

その手を乱暴に取り、ベッドから起きる。

「あ、あなたは先に行ってもらして。わたくしはちょっと部屋に戻りますわ」

「分かった。先に行ってる」

彼はそう言って医務室から出て行った。

「……はあ……………」

若干、自分の考える理想像とは離れているものの、試合の時の眼にも、先程の眼にも、輝きがあった。どんな宝石よりも、どんな光にも負けない、芯の強い、不滅の輝きが。

「師鳳、神薙……」 / / / / /

名前を口にすると、胸が熱くなる。ドキドキする。どうしようもなく、切なく、胸が苦しくなる。なのに、甘美で、喜びを感じる。

「……………」 / / / / /

もっと知りたい。

もっと、彼の事を知りたい。

自らの身をぎゅっと抱き締め、思う。

窓の外は夕陽の完全に沈みきらない、茜空と藍空の狭間の世界。早くも空に、一番星が輝いていた。

T o b e C o n t i n u e d ……

第4話 2つの雪片（後書き）

いやあ……

神薙のキャラが自分で書いててわかんなくなっちゃいましたよ。

何ですか最後は！？

“無邪気な笑顔”て！

“子供っぽい笑顔”て！

ほんともう……自分の考えが分からない。

まあ、そう言う訳で、次回は随分前に達成したPV10000を記念して、番外編やっちゃいます。

内容は「IS学園入学前の神薙の生活」みたいな感じにしたいと思います。

それでは、次回もお楽しみに！

PV10000達成記念番外編 己の恥ずべき過去 :

ペンネーム「araw

2ヶ月も放置してすいませんでした。
かなり長い番外編です。

『フフフフフフ……』

「……………」

これは、後にベルギー空軍第201特殊戦闘部隊、通称【フェンリル】に語り継がれる、ある男性士官の、自称『何とも不名誉で不可解で不条理で理不尽（と言つ名の他の男からは楽園^{エデン}）』な数日の記録である。

「……………」

『逃がしません、中尉。フフフフフフ……』

「…………叩き潰すよ?。」

side???

IS学園入学半年前の夏。

その年は例年より暑い夏のある日だった。

「……暑いのは、イヤ……」

ベルギーのある基地でその日、ある女s「作者……」ゲフンゲフン、
もとい男性は外で珍しくうなだれていた。

名前は「師鳳神薙」。ベルギー空軍の特殊部隊、第201特殊戦闘
部隊通称【フェンリル】に所属する男性士官である。

しかし彼は、そんな特殊部隊に所属する士官中、最も特殊だ。

「ちゅーい！早く行きましょー！」

「そう急かないの。中尉が暑いのが嫌いなのは知ってるでしょう？」

「うゝ……でもおゝ……」

「そんな事言ったらアイスは無し。中尉も早く来ないとアイスなし
「今着いた」……OKです」

彼を呼んだのは部隊の同僚、神薙と同じく暑さにうなだれているツ
インテールの女性「サラ・エリスター」と、2人に“アイス無し”
のペナルティを科そうとした背の高い女性「ウラヌス・アグエラ」
だ。

「……やっと、着いた」

そこは大きな格納庫^{ハンガー}。中には2mから3mの様々な機械が所狭しと
並んでいる。

「これからが本番ですよ、中尉」

「楽しみ楽しみ♪」

「サラ、これは…任務」

「解ってますよう…って、あえ！？中尉いつの間に!？」

「私ですよ」

「ゲッ！ウースまで、早くしなきゃ！」

「……早くして…」

神薙が呆れた様子でサラを上から見る。

「そう言う中尉だって、さっきのは何ですか？」

「うっ……」

「ウース！中尉！行きましょう！」

「解りました。中尉、続きは帰ってからです」

「…ウース……もう無しの方向性で…」

「フフツ、それは無理な相談ですね」

神薙のモチベーションがバカみたいに下げられたところで、3人はハンガーからリニアカタパルトに接地する。

右に、突撃火力中心の黄色のIS【ラファール・リヴァイヴ・カス

タム？ノヴレイヴ・スター」に乗ったサラと、左に、遠距離狙撃火力中心の赤い「ラファール・リヴァイヴ・カスタム？ノフォート・ストーム」に乗ったウラヌスが、神薙の「インパルス・イーグル」を挟むようにリニアカタパルトに乗る。

「第201特殊戦【フェンリル】所属、ソニック1・師鳳神薙ノインパルス・イーグル」

「同じく【フェンリル】所属、バスター1・サラ・エリスターノヴレイヴ・スター」

「同じく【フェンリル】所属、フェザー1・ウラヌス・アグエラノフォート・ストーム」

『出撃する（します）！！』

3人は並んで空に飛び立つ。
インフィニット・ストラトス
ISを駆つて。

side out

side 神薙

空軍に入って早4年。

イーグルの動きの特徴は完璧に捉えた。

小さな動きにも機敏に反応するから俺には都合がいい。

そして空を飛ぶのは好きだ。

が……

「……暑いのは、嫌い……」

「中尉そればっか」

「ISに乗ってる分にはそんな事はないでしょう？」

「……太陽の日差し…暑苦しい」

『ああ……はあ……』

そんなに呆れなくても…

《さあ、駄弁るのはそこまでに置いて置いて。ミッションは首脳会議の会場警備と敵哨戒です。

位置は中尉が北、サラが南西、ウラヌスさんが南東です。ドイツの特殊部隊も参加している為、

非常時には連携して対処してください。また、各地上部隊も展開終了です。何か質問は？》

基地にいるフェンリル・ソニック分隊所属のコマンドの「アージュ・リン」から通信が。

「ある、ちゅーい？ウース？」

「無いわ」

「………」（フルフル）

「と、言う事だよアージュ」

《了解しました。何かありましたらすぐに通信入れて下さいね》

「時間無い。…………急ぐぞ」

『了解!』

イーグルのスラスター出力を上げると共に俺の両脇にいるISも出力を上げ、各武装の安全装置を切る。

「…………ウース、現地とドイツの特殊部隊、部隊配置の情報…………」

「あります。サラにも見せるわ」

「ふむふむ……はあゝん……なるほどね……こりゃ頼もしいかもね」

「武装は……火力はやっぱり申し分無いですね」

「しかもさらにパワーアップしてるし。だけど、機動力はこっちが上だけどね」

「何せ中尉がいますから」

「そだね」

「…………配置も問題無し」

「天候は晴れ、1500から雲が出始めます」

会議中に雲が出始めるのか。あんまり好くないな。レーダーの感度

と範囲を最大にして、
目視の索敵もセンサーの感度を上げるか。

「了解」

さあ、始めようか。

side out

side???

首脳会議会場付近

ある1台の通信車両

《ソニック2へ、こちらソニック1。護衛対象地点に到達。バスタ
ー1・フェザー1も到着した》

神薙の声が車内のスピーカーから流れる。

「了解。配置に着いて下さい」

《了解》

「ふう〜…これでやっと少し楽になる」

「ですね」

「後は隊長達のリーダーに任せられる」

「そうね。地下班、状況は？」

《今は特に。引き続き警戒、監視します》

「ええ、頼むわ」

中には女性仕官3人がアーマーを身に着けたままコーヒーを飲んでいた。

「失礼。ラシュウィン少尉はどちらに？」

その時、違う制服を着た銀髪の女性が尋ねてきた。

「私です」

先程神薙の通信に応じていた女性仕官が立ち上がる。

身長は170弱。モデル体系で蒼い長髪を靡かせてそこへ向かう。

「私はドイツ軍IS配備特殊部隊【シュヴァルツェ・ハーゼ】副隊長、クラリッサ・ハルフォーフだ。」

「そちらに出向けず申し訳ありません、大尉。メリッサ・ラシュウ

インであります。

後ろの二人はアルメイダ・エンフォース少尉、メイサ・ルーヴェン
ス少尉であります」

メリッサの後ろにいる2人はクラリッサに敬礼する。

クラリッサは黙って敬礼し返し、またメリッサに向き直る。

「お久しぶりです、大尉」

にこやかに話しかけたメリッサに対して、クラリッサも表情を和ら
げる。

「ああ、久しいな。実に2年振りだ。隊の全員は元気か？」

「ええ。特に中尉はまた少し、表情が豊かになりましたよ」

「そうか。きつと配置に着くときに隊長と話すだろうし、私もこれ
が終わったら挨拶しに行くでしょう」

それにしても、隊長はあの日からそっちの隊長の事を思っているよ
うだ」

「まあ！それはまた面白そうな……」

「ああ、だから私たちはそれを全力でバックアップして……」

そんな感じに向こうは向こうで盛り上がってるのを、

背の低さがコンプレックスのフェザー2、アルメイダと

男勝りな性格のバスター2、メイサが見守る。

「メリッサさん、楽しそうですね」

「まあ、2年ぶりだからな」

「そうですね…」

首脳会議会場上空

「久しぶりです皆さん」

「どもっす〜！ラウラ少佐」

「……………」（ペコリ）

「ああ、久しぶりだな」

到着した3人を待っていたのは、【シュヴァルツェ・ハーゼ】の隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「……すまな……すいません少佐……協力してくれて」

「口調は気にしなくてもいい。そ、それに……これぐらい、なんてこととは無い」／／／／／

「………ありがとう、ラウラ」

素直に嬉しかった神薙は微笑んで礼を言った。

「……………ッ！……きつ、気にしなくてもいいと言っただろ！…！」／

／／／／

その顔を見て顔を真っ赤にしたラウラがそっぽを向いた。

「……何も怒らなくても」

『はあゝ……中尉それは無いよ……』

「？………？？？」

「ラウラ少佐もえらい人好きになっちゃいましたね」（こそこそ）

「そうなんだよねゝ…まさかここまでとは……」（こそこそ）

「でもあの場面で惚れないのも考え物なのでは？」（こそこそ）

「そうなんだけどさゝ……もう何て言うか……」（こそこそ）

『はあゝ………』

「??????」

「………」／／／／／

こっちもこっちで変な空気だった。

「すみません隊長、ちょっと話していて……って、何だこの空気は？」

そこに状況がよく解っていなかったクラリッサがやってきて、この空気のよくわからなさに若干引いた。

「……そんな事より、そろそろ始める」

「そ、そうだな。全部隊に通達。部隊展開、配置に着け!」

『了解!』

「……ラウラ、頼んだ」

「ああ」

それから1週間、特に問題も無く、無事に首脳会議の全工程が終了。
ラウラたちシュヴァルツ・ハーゼと別れて基地へと帰投した。

基地帰投後

「ただいま〜!!」

「ただいま帰投しました」

「…帰投した」

『お帰りなさい!』

基地指令に事後報告した後、神薙たち3人は隊舎へ戻ると、居残り
組みの隊員が出迎えた。

「中尉、メリッサ少尉たちは何時戻られますか?」

その時神薙に近づいた隊員の名は「アシュリー・レイラー」。
バスター分隊・バスター3である。

「……2時間後」

「ミッション、お疲れ様でした」

「アージユもコマンドお疲れ」

そんな風に他の隊員たちと話しているサラとウラヌスを横目に、
隣の部屋に入り、神薙は注ぎたてのコーヒーを飲みながら大好物の
バニラアイスをただひたすらに食べ始めた。

「神薙君」

「？」

神薙が呼ばれた方向を向くと、そこにはメリッサに負けず劣らずス
タイル抜群の女性士官が話しかけていた。
手には神薙に同じくアイスがあった。但し味はチョコレート。

「同席しても？」

髪はブロンドに光り輝き、カチューシャを着けてストレートに腰ま
で下ろしていた。

瞳は青、欧州人特有の色白な肌はまさに粉雪のように白く透き通っ
ていた。

「ランスロット大尉……どうぞ」

彼女の名は「アイリス・ランスロット」と言う。

「ありがと、神薙君」

「……いえ」

そして彼女は

「今回のミッションでシュヴァルツ・ハーゼと一緒にだったらしいけど……」ジリ……

「……」ス……

「しかも1週間だったよね……」じりじり……

「……」スス……

「穢されていないよねッ!? まだ純潔のままだよねッ!?」ダン!!

「……!!」コクコクコク!!!

神薙を熱愛する変態で恋する乙女だ。そいでもってストーリーカーでもある。

「良かった……でも、もし穢されちゃったら私が綺麗に清めてあげるから安心してね」

そう言って神薙に抱きつく。

「……全然、安心できない」

むしろ身の危険を察知した神薙は、この後の展開に大いに苦しめられるのであった。

「うーん…神薙君かわいいうよう」

「……頬ずり、しないで。暑いから」

「私は気持ちいいよ?」

「……怒るよ?」

「怒った神薙ちゃんもかあいい!!」

「……末期だ」

それしか言えなかった。呆れ過ぎて。

因みに彼女はフェンリルの隊員ではない。

アイリスの所属は情報・電子系統の特殊部隊、ベルギー空軍第49電子戦特殊偵察小隊、通称【ヴァイス・カラミティ】の隊長である。

「それより……今日は何故?」

神薙が用件を聞くや否や、アイリスの目付きが真剣そのものになった。

「重要な報告があるからよ」

「……本当は？」

「神薙ちゃんを愛でる為」

「……………」

そして神薙は徐に赤いスイッチを取り出した

「？これは？」

「…こう使う」

そして赤いスイッチを押した。

《緊急事態！緊急事態！至急信号の位置へ！！！》

「！？ナニコレッ！！？」

「緊急信号」

「何でそんなもの勝手に押したの！？」

目線をアイリスの顔に向ける。

そして右手でアイリスを指す。

「……緊急事態」

「？私？」

「……………」コクン

大きく頷く。

ドタドタドタ……バン！！

『師鳳中尉！！どうかされましたか！？』

総勢10人の女性兵士（内5人が上級士官）が部屋に入ってきた。

「侵入者」

指を指したままアイリスから目を反らす。

……………。

「え？」

「……………早急に」

『はっ！！！』

「えっ！？ちよつ、待つて待つてえええええええ……………！！！！」

バタム！

そうして嵐の予兆は去った。

「……………これで、安心」

そしてまたアイスを食べ始めた。
今度はバニラアイスにエスプレッソをかけて。

.....

そして.....

1900、フェンリル隊舎内

「こちら、カラミティ1、聞こえる？」

《こちらカラミティ2、感度良好》

《こちら3、同じく》

「では、ミッションスタート」

《了解》

「フフフ.....神薙ちゃん、覚悟しておいて。私達があなたの童貞を綺麗さっぱり貰っちゃうから.....」

.....

「クシユン！」

「中尉、風邪ですか？」

「?…さあ？」

「アイスの食べすぎとか……」

「サラ……どさくさに紛れて、盗ろうとするな」

「な、なんな事か「アイス無しです」「ごめんなさい」

s i d e o u t

s i d e メリツサ

基地に帰投してから約4時間。疲れが目に見えて分かるまで瞼が重い。

中尉達と夕食を共にし、バスタイムも終えた。後は寝るだけ。

……… だったのだが、

P I P I P I !

と端末が信号をキャッチする。見てみると、そこには「侵入者」の文字。

「……またか…はあ」

額に手を当て深くため息。

どうやらアイリスは性懲りもなくこの隊舎に侵入してきた。しかも今回は仲間まで引き連れて。

端末に素早く文字を打ち込み、送信。

- - フェンリル隊全員へ

緊急事態、codes・A。至急脱衣所前、窓側面、通気口付近に各隊員配置につけ。

- - 入浴中の師鳳神薙中尉をアイリス・ランスロット大尉他2名の雌狗から死守しろ。 - -

急いでカメラの映像を各個人の端末に配信。逐一確認する。他にも、赤外線、音感、レーザー、熱反応の各センサー、総勢248機の感度を最大にし、監視する。

私達が、中尉のいる浴場^{エデン}を守りきらねばいけない。我が隊の姫を護りきらなければ。

私達だって見たいのに、アイリス達だけで決行だなんて……いやい

や、そうじゃないわ。兎に角、中尉を護らねば、貞操の危機に……！！

……私としたことが、取り乱してしまった。

何にしろ、中尉の危機に違いはない。

兎に角、全力で死守するわよ！

side out

side 神薙

かぼーん。

「…癒される」

きつと顔は緩みきつてグニヤグニヤだろう。

疲れはお湯に溶け出し身体が軽くなると同時に、心地よい眠気を誘ってくる。

現在、俺は隊の誰よりも遅く、20人は軽く入るであろう大きさの大浴場に浸かっている。もっと言えば大浴場を独り占め。

……最高の響きだ。
もう一度。

「……独り占め」

一回でも呟けば、限らない優越感に浸れる。まるで魔法の言葉。
まあ、魔法なんて非現実的な代物を信じようなんざ砂糖一粒程も考
えてないけど。

パシャツと手で掬ったお湯を顔にかける。

風呂は良いなあ、風呂は。

ブクブクと鼻の下辺りまで浸かる。

「ぶに、やあゝ……ぶくぶくぶく」

因みに髪はタオルを巻いてその中に閉じ込めている。だって髪濡れ
るのやだもん。因みに俺の平均入浴時間は1時間。んまあ、男なん
ぞの入浴時間なんざ、誰が得するものかミジンコ以下でも解るよう
な話だが。

ザバアッ！と風呂から上がり、良く体を拭いてからサウナへと入
る。大体20分位。

サウナはいいよサウナは。風呂の次に最高だ。
ランキングだと5番目。

1番目はISに搭乗^のてる時、2番目は任務終わりのアイス。3番
目がご飯で4番目に風呂と来る。

………思ったよりなかなか低いな。

サウナにはプラスマテレビがあり、好きな番組を見ることが出来る。
今日の気分は“癒し”だから……そうだな……

「…コレ」

テレビのチャンネルを変えると

にゃ〜ん…にゃ〜ん……

猫のどアップと可愛らしい鳴き声が。

にゃ〜ん…

「……………」(プルプル)

さ、最高です………！

猫、可愛いです！

飼いたいです！！今すぐ！！！！

そうやって目をキラキラさせている俺は、その外の様子には気が付く暇もないのだった……。

にゃ〜ん、にゃ〜ん

「に、にゃ〜ん……」／／／／／

はううう… / / /
癒される… / / /

side out

side???

神薙がサウナで猫に癒され、萌え悶えている頃、大浴場&脱衣所の
周りでは……

「ふっ！はっ！」

「はああッ！！」

「タアアッ！！」

「ヤアッ！トウッ！！」

……戦争BOPPATSU

いや、星とか付けてる程可愛いじゃないよ、うん。
だって……

「うおりやああああー!!」

「アアータタタタタタタタタタ……!!」

キンツ!!ガキンツ!!

ダン!!ドン!!ズドン!!

パン!!ズバン!!

ズダダダダ!!

ズドドドド!!

……

ちゅどーん

普通に戦争やってんだよ、基地内の施設で。

徒手格闘とナイフによる近接戦は勿論の事、北。真拳に。剣流剣術。更にはなんでかアサルトライフルに軽機関銃、RPGにグレラン、ショットガン、スナイパーライフル、フラッシュグレネード、スモークグレネード、C4。終いにはジャミングの機械まで取り出して、マジな戦争を繰り広げている。

…その内タンクやらヘヴィーアーマ―やらが出てきそうで怖い。

そんなこんなで遂に、フェンリルVSヴァイス・カラミティであるわけだが、どう見てもヴァイス・カラミティの劣勢に見えるが、実はフェンリルの方がかなり追い詰められている。

アイリス率いる電子戦部隊が何故、メリッサ率いる前線部隊に劣勢なのか。それは…

“裏切り”である。アイリス達はフェンリル隊員を“説得”と言う
なの洗脳でこちら側に寝返らせたのだ。

「貴女達は見たくないのか！？君達の部隊長、師鳳神薙部隊長の艶
姿、もとい美しい曲線美を。湯気で曇るバスルームのドアを開け放
てば、そこには…水を弾く、美しく白い肌を持った妖精がタオル一
枚でその身を覆い隠し、湯の泉に細くスラッとした脚を浸けて…し
つとりと濡れた黒髪が揺れて…すつとした目を流して…その妖艶な
輝きで私達を誘っているのよ…！」

「なっ……………！！」／／／／／

「それでも…貴女達はそんな馬鹿げた事をやり続けると言うの？」

「……………」

「さあ、今こそ立ち上がる時！全ては理想郷アウアロンの為に！その命を燃や
し尽くすのよ…！」

「うおおおおお…！！！！」

とまあ、こんな具合に欲望の化身と化したフェンリル隊員がその任
務に命を業火ぼつの如く燃やしているのだ。それを止める方が難しいと
言うものだ。

人間、欲望に向かって突き進むときは、人間の限界だって軽く凌駕
するのもたわいもない。

「うおおおおお！！今こそ立ち上がる時イイイイツツ！！！！」
「！！！！」

「クツ…ダメだわ、完全に圧されてる……。けれどこれ以上退くわけには…「メリッサ副隊長！C-2から連絡途絶えました！」何ですって！？……このままじゃ…アグエラ少尉とエリスター少尉は！？」

「応答なしです！」

「やっぱり……ここは、私達だけで食い止めるわよ！いいわね！？」

『Ya!!』

一方のアイリス達はと言うと…

「フツ…」

ドスッ！

『きゃああああ!!』

ボタン！

「こちらカラムティ1。“ラストゲート”を 確保。理想郷へ向かうわ」

『了解』

とある通気ダクトの下を守っていたフェンリル隊員全員を気絶させ、そこからアイリスがダクトに入って行った。

このダクト、実は脱衣所に繋がっており、出る場所も丁度大浴場の入り口側なのだ。

アイリスは赤外線は見る事が出来る暗視ゴーグルと、携帯型妨害電波発信機を複数持つてそこを進む。等間隔で発信機を置いていき、そこにつけられたカメラやセンサーを次々と無効化していく。

「チョロい。チョロ過ぎるわ。こんなんで私を止められるなんて、思わないで」

そして…

「隊長、カラミティ2、3。合流しました」

「お疲れ様。さつ、理想郷は目前よ。気を引き締めて行くわよ」

『Ya』

その後、脱衣所への侵入に成功。フェンリルは全く気付いていない。

「さあ、遂に…神薙ちゃんが（性的な意味で）私達のモノになるわ……ああ…考えただけで背筋がゾクゾクしちゃう」

アイリスは身悶えつつも、しっかりと大浴場に繋がる引き戸に手をかける。

アヴァロン
「理想郷よ、私達に祝福を！」

ガラッ

と引き戸を引き、大浴場に侵入する3人。

その目の前には…

湯船から立ち上る湯気を纏った妖精が縁に腰掛けていた。
白い背中に艶やかに光る、烏の濡れ羽色の髪を下ろし、顔を上気させ、タオルは前だけを隠していた。

「……………」

息を呑む程の美しさ。

「……………」クスッ

3人に流し目を当てる。

『……………っ!』 / / / / /

その笑みは、全ての人間を誘い、惑わし、虜にする。文字通り、魅惑の微笑み。

「……………お疲れ様……王子様」

「ああ……神薙様……」 / / / / /

「なんて美しい……………」 / / / / /

「ほう……………」 / / / / /

三者三様の反応だが、見惚れているに違いない。

「ああ……美しい……………これぞ、理想郷よ」 / / / / /

「アイリス隊長！もう我慢なりません！！」

「私もです！！」

「ええ…行くわよ！！」

ダツと神薙に飛びかかる3人。

しかし、神薙はふらりと交わす。湯の泉に佇み、胸元からタオルを当ててクスリと妖艶な笑みを浮かべる。

幾ら男と言えど、神薙は誰がどう見ても絶世の美少女にしか見えな
い。

つまり、その一見何の意味をなさないその行動ですら、人を誘う事
などたわいもない事だ。

湯船に沈んだ彼女らが湯面から顔を上げる。

「…せっかちな王子様。とっても良いもの、あ・げ・る？」

少しずつタオルを下げていく。

再び言うが、神薙は誰から見ても絶世の美少女にしか見えない。だ
から胸の膨らみなんて無いものの、どうしても少女が誘っている様
にしか見えない。

『お、おおお……』 / / / / /

見惚れる3人。

そして、

「……クスッ」

「ん？」

神薙の指には金と銀のリングがはまっていた。

「……楽しく（・・・）、なりましょう。……クフッ」

「し、しまッ」「【インパルス・イーグル】起動。武装展開、レスティアM991-HPB。モードサブマシンガン・超音速速射」ソニックファイアシフト」

一瞬の閃光の後、そこにいたのは神薙の愛機、インパルス・イーグルとその武装、マルチロールショットガンのシルエットだった。

「楽しみましょう？ 私の王子様達……クスッ」

「カラミティ、撤退！！」

『Ya!!』

「…させるとでも？」

戦線離脱する3人だったが、回り込まれて退路を失う。

「クッ…だけど、ジャミング！！」

アイリスの判断で、先程の携帯型妨害電波発信機のレベルを最大にする。

これにより、ECMに同じだけの効果が期待できるのだが…

「…対電子戦様妨害電波…発信」

インパルス・イーグルに搭載されたソフトウェアにより、無効化・機能破壊され、完全に手立ては失われた。

チャキツ！

「……残りの命を生きたいなら…俺を止めろ」

「言われずとも！ヴァイス・レーゲン！！」

「スカーレット・シャイン！！」

「ライトニング・アロー！！」

3人もISを展開、神薙に対抗する。

「これで3対1。私達の勝利もど」ブレイブ・スター！！」「フォート・ストーム！！」「何ですって！？」

ズガァン！

大浴場の壁をぶち壊して入ってきたのは、フェンリル隊の2人だった。

「…ナイス…タイミング」

グツと親指を2人に立てる。

「そんなのどうでもいいよう…どうすんのさこの騒ぎ！」

「全くです。どう処理するんですか？」

「……複数部隊による抜き打ち演習・奇襲」

「そんなのでどうにかなるんですか？ 6機もIS引っ張り出して」

「……どうにか……するの。……力業で」

「……中尉、それはあんまり賛同しないよ」

「……強制参加」

「はいはい、それじゃあ演習、始めますよ」

『Ya』

短い返事の後に展開した各武装を構える。

「………」

「………」

『………』

「………GO………」

「はあああああ……！」

「やあああああー!!」

ズダダタツ!!

ズドドドツ!!

フロント同士の激しい至近銃撃戦。

「……フツ……」

「……………」

ダァン!!

ドォン!!

バック同士の静かな中距離狙撃戦。
そして…

「ハッ!! ヤァァァ!!」

「クツ……………」

ダダン!!

キン!! ズバン!!

大浴場の天井を破り、夜天の海を飛び回る荒鷲と白鳥。

ヴァイス・レーゲンの2点速射を雪片参型でいなし、手持ちのシヨ

ダブル・バースト

ットガンで牽制。

下の4人に比べ、広大過ぎる夜空を飛び回るその様は、光と爆音の華麗な舞踏であった。

（全く以てキリ無いわ。ショットガンの所為で全く近づくことができないどころか、まともに撃たせて貰えない……こうなったら……）

アイリスはその場から急速離脱、夜空へ高く飛び上がった。

「……真っ白だから、よく見える」

神薙はレスティアM991をサブマシンガンモードに切り替え、ホロサイトから覗く。

ズダダダダダッ！！

長い連射音。マガジン1本分の弾丸を撃ち尽くし、また装丁、アイリスを追撃する。

（残りはサブマシンガンが2、ショットガンが1。…これだけじゃ足りない。近接2つはあまり使いたくないし……はあ、あれ（・・）使っちゃいけないか……）

追撃しながらイメージを浮かべ始めた

設計は開発者。日本とドイツが共同開発した神薙だけの専用武装。

一方、地上では…

《フェンリル隊全隊員に告ぐ！神薙部隊長が戦闘開始、共にフェザー、バスター両分隊隊長も戦闘に参加！アイリス他2名と戦闘中！援護に回れ！！》

アージュからの通達。既にハイの状態で、ヘヴィマシンガンをぶち込みながら通信を行っているらしい。爆発的な発砲音がメリッサの耳に流れ込む。

「メリッサ！そろそろぶつ放してアイツ等全員の頭起床させていいか！？」

近くでロケランとグレランで迫撃するメイサがメリッサに許可を問う。

「いいわ！メッタメタにたたき起こしてあげて！！」

「それって叩き潰してるだけじゃ…」アルメイダ、何か言ったかしら？「イエ何モ！」

ショットガンとマシンガンで牽制していたアルメイダはメリッサのブレッシャーその重圧の含まれた笑顔に怯え、マガジンを装丁する。

「行つて！！」

「Ya！！」

メイサはバリケードに隠れ、右腕につけている腕時計のスイッチから電波信号を発信。

ーアーマイインストール、No.2。ロックナンバー／*****
*。ロック解除、粒子転換、完了。転送……発現可能。

「てめえら！めえ醒ましやがれてんだ！！こんの糞野郎の大馬鹿
やろおおおお！！！！！！」

…SA発現／ケルベロス

メイサの光り輝く腕時計から発現した武器。それは、ミサイル10
連射が可能な大型ミサイルランチャー【SA（Special Ar
mer）No.2／ケルベロス】だった。

「消し飛ばえええええ！！！！！！」

「消し飛ばしちゃダメですううううう！！！！！！」

バシユバシユ、バババババ！！

長い煙の尾鰭を引いた10機の猛狼^{ミサイル}は与えられた餌^{てき}をむさぼり尽く
し、1つたりとも食べ残さない。

ズドドドドドドド！！！！！！！！！！

「全弾命中！！」

「……後始末どうするんですか？」

終始呆れかえっていたアシュリーが2人に聞く。

『複数部隊による抜き打ち演習・奇襲』

「…はあ…もう、何でも良いですよ」

更にやってられるかと付け足してなお、敵を掃討しているアシュリ
ィ。

（なんだかんだで、アシュリーは素直じゃないですね）

アルメイダは眉はハの字にして苦笑いしていた。

「さっ、さっさと片付けてコーヒー飲むわよ!!」

『Ya!!』

そして大浴場（だった所）

「ウース！そっちの達成度は!？」

未だにスカーレット・シャインと至近距離からの超高速銃撃戦を展開しているブレイブ・スターノサラ・エリスターは、その数十m先でライトニング・アローと中距離精密狙撃戦を繰り広げているフォート・ストームノウラヌス・アグエラと近況報告をしていた。

《……良いとでもッ!!…思ってるんですか?》

「やっぱりそっちも苦戦してるのか…」

当たり前だよね、と苦笑いしながら敵の射線上から外れつつ、28mmサブマシンガン【シルヴァニア】でスカーレット・シャインを牽制する。その距離、2m。所により1m未満の超至近距離、又はゼロ距離で射撃戦を演じて見せる2人は、まさに“超人的”な動体視力と反射神経、反応速度をフル活用していた。おかげで2人の食らったダメージは、初めて既に30経過していると言っのに足しても150に満たない。

「無駄口叩いてる暇でもあるのか、なッ！」

「ギリギリ！ツと、仕返ししてあげる！！」

「何の！！」

互いに両手に構えるサブマシンガンを数発撃つごとに、バク転。その途中で数発。それを左に避けて真横の状態で数発。更にそれを射撃直後のモーション捻りを加えて流す。

まるで次元が違うその激しさに、身体への疲労が重なる。

「結局、全く以て“ある意味”話にならない訳ですか…おっと」

「しっかり前、見てないと当たるぜ？」

「ご忠告ありがとうございます」

静かに、そして穏やかに。その誤差、約0・02mmの超精密狙撃を紙一重で交わし、構えて、狙って、撃つ。この間、約0・5秒。それを繰り返すこと十数回。

カチッ

「ん？」

カチッ

「弾切れ…」

互いに弾切れとなった対ISライフル【アルテミス】。

「…第二幕」

「開始ッ！！」

2人はアルテミスに装弾数20発のマガジンをロード、初弾発射までたったの2秒。そしてまた、狙撃戦が始まる。

そして遙か上空。

ズダダダパパッ！

「…弾切れ」

最後のマガジンを使い切り、全く以て“銃”としての使い道を果たさなくなった多目的散弾銃を戻し溜め息を吐く。

「やっと追撃が止まった……反撃開始ね」

アイリスは右手に、白の直方体を出す。長さは2・5mに達するだろう。

「…重粒子レーザー【サイプロス】」

「良く知ってるわね」

「…伊達に兵器開発に携わっている訳じゃない」

「コレの存在を知ってること時点、流石としか言い様がないわ。それじゃ、これで終わりよ」

最後の一言にありつただけの殺意と重圧を加えて、そのエネルギーを充填する。

（サイプロス…いやな相手だ。フレキシブル・バースト 偏向砲撃が出来るなら尚更。こつちに勝ち目がなくなる前に、さっさとアレを出す）

神薙の想像するそれは、見掛けだけならただのヘヴィマシンガン。だけど威力なら、連射可能火器で最強。軽く全てを微塵に変えられるだけの能力を持っている。

「…発現可能、モード・ブラスター」。

そして、その名を呼ぶ。

「……発動、天騎煌然。武装展開、99式電磁投射砲 / type 99」

右腕を包むように輝いたその場所には、灰色のレールマシンガンノ
99式電磁投射砲があった。マガジンもドラムマガジンが2つ備え
付けられている。

「なっ……！！！」

「……コレで、終わり」

アイリスの言った言葉をそのままそっくり投げつけて、標準を向け
る。

サイプロスは……まだチャージ出来ていなかった。

「……サイプロスは、スピードチャージャーが必要……と」

引き金を引く。

————！！！！！！

辺りに鳴り響く爆音と、迸る閃光。

1秒間に20発の連射能力に圧倒され、成す統べなくアイリスのシ
ールドエネルギーは一瞬にして消え去り、墜ちていく。

それを見下ろしながら通信回線を開く。

「ソニック1よりフェンリル各員へ。敵総指揮官を撃墜。戦闘終了」

………

その後、この大騒動は神薙の手により“演習”となり、関わった全員にお咎め無し。やり過ぎとは言われたらしいが。

かくして平和的解決となった。勿論、崩壊した隊舎は建て直され、今では護衛付きの神薙専用の風呂まで出来た。

ただ、今回の騒ぎの張本人の1人は

「…息苦しい」

と呟いたそうな。

一方、奇襲が失敗した3人は……

「アハハハハハハ!!」

「ウフツウフフフフ!!」

「あひゃひゃひゃひゃひゃ!!」

神薙の「オシオキ」により1週間精神崩壊していた。

「なんて言っか…」

「馬鹿らしいわね…」

『はあ………』

T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

まず読者のみなさまに一言。

本当にすいませんでした!!!

一応、1話前の時から書き始めていたのですが…どうも上手くいかなくて、今日に至りました。

次回からはもう少し早く仕上げられるよう精進します。

そんな訳で次回はクラス代表決定戦の翌日からです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0714t/>

IS インフィニット・ストラトス 荒鷲の軌跡

2011年11月16日10時20分発行